

平安京左京四条一坊十三町

- 壬生坊城町の調査 -

2011年

古代文化調査会

平安京左京四条一坊十三町

- 壬生坊城町の調査 -

2011年

古代文化調査会

例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区壬生坊城町において、株式会社セレマによる葬儀場建設に伴い実施した平安京左京四条一坊十三町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社セレマより委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は家崎がおこなった。
5. 図面及び遺物整理は、板谷桃代、上垣雅子、阪倉龍平、須貝淑恵、水谷明子が分担し、製図は水谷が担当した。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系 VI による。
7. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の 2500 分の 1 の地図（壬生）、国土地理院発行の 25000 分の 1 の地図（京都西南部）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じた。
9. 遺構・遺物番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

芦田太司 家原圭太 石阪文平 宇野隆志 馬瀬智光 梶川敏夫 北田栄造
齋藤武雄 鈴木久史 西森正晃 長谷川行孝 堀 大輔 前田義明 宮原健吾
（株）明輝建設 （株）大高建設 （有）京都編集工房
（財）京都市埋蔵文化財研究所 （株）櫻井康裕建築都市設計事務所 （株）セレマ

本文目次

平安京左京四条一坊十三町

I 調査に至る経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺構	7
IV 遺物	14
V 小結	25

図版目次

図版 1	遺跡	1	第 2 面全景 (南から)
		2	第 2 面南西部 (南東から)
図版 2	遺跡	1	第 3 面全景 (南から)
		2	第 3 面南西部 (南東から)
図版 3	遺跡	1	第 4 面全景 (南から)
		2	第 4 面南西部 (南東から)
図版 4	遺跡	1	堀 78 北壁断面 (南から)
		2	堀 78 南壁断面 (北から)
図版 5	遺跡	1	井戸 76 (南東から)
		2	井戸 76 土器出土状況 (南から)
図版 6	遺跡	1	土壙 124 (南から)
		2	土壙 154 (北から)
図版 7	遺跡	1	池 144 上面足跡出土状況 (東から)
		2	建物 1・2 (北西から)

- 図版 8 遺跡 1 池 144 南東部 (南西から)
2 土器 3 出土状況 (東から)
- 図版 9 遺物 池 144・土壙 154・井戸 76・池 144 整地層出土遺物
- 図版 10 遺物 溝 33・堀 78・池 144・池 144 整地層出土遺物
- 図版 11 遺物 土壙 154・土壙 124・土壙 69・池 144・土壙 68 出土遺物
- 図版 12 遺物 堀 78・土壙 124・柱穴 38・1・A～C 区清掃中・土壙 69・土壙 131 出土遺物
- 図版 13 遺物 土壙 124・土壙 37・土壙 154 出土遺物
- 図版 14 遺物 土壙 124・堀 78・柱穴 38・柱穴 59・池 144 整地層出土遺物
- 図版 15 遺物 井戸 76 出土木製品

挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	調査地位置図	2
図 3	平安京条坊と調査地位置図	2
図 4	四行八門と調査位置関係図	2
図 5	東壁断面実測図	4
図 6	北壁断面実測図	5
図 7	南壁断面実測図	6
図 8	第 1・2 面遺構実測図	9
図 9	第 3・4 面遺構実測図	10
図 10	池 144 断面実測図	11
図 11	溝 33 断面実測図	11
図 12	土壙 124 断面実測図	11
図 13	建物 1 実測図	13
図 14	建物 2 実測図	13
図 15	井戸 76 実測図	13
図 16	池 144・池 144 整地層出土遺物実測図	14
図 17	土壙 154 出土遺物実測図	15

図 18	井戸 76 出土遺物実測図	15
図 19	土塙 126 出土遺物実測図	16
図 20	溝 33・堀 78 出土遺物実測図	16
図 21	軒瓦拓影・実測図	18
図 22	軒瓦拓影・実測図	19
図 23	軒瓦拓影・実測図	21
図 24	軒瓦拓影・実測図	22
図 25	刻印瓦拓影・実測図	22
図 26	井戸 76 出土木製品実測図	23
図 27	池 144 整地層出土遺物実測図	24
図 28	調査地点と日蓮宗寺の構え跡関係図	26
図 29	調査区と堀の位置関係図	26

平安京左京四条一坊十三町

I 調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区壬生坊城町である。当該地は周知の遺跡・平安京跡の左京四条一坊十三町にあたる。今回の敷地の北半部は2006年に（財）京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査がおこなわれたが、結局、当時建物建設が延期され、それ以降南半部が同一敷地となり、倍程に広がった敷地全体が駐車場となっていたところである。2011年の冬、当地に株式会社セレマによる葬儀場建設の計画がなされ、京都市文化財保護課は2006年の調査を踏まえて、試掘調査を実施したところ、良好な状態で遺構が残存していることが判明した。京都市の指導の下、施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうことになり、調査は2011年2月より開始することとなった。

II 調査の経過

当該地は、平安京左京四条一坊十三町に相当し、西側が楠司小路、東側が大宮大路、北側が錦小路、南側が四条大路に囲まれたところで、調査対象地は十三町の中央西半部の西一行北四・五門に相当する。2006年におこなわれた北隣接地の発掘調査では、平安時代前期の池跡、後期の池、井戸跡、鎌倉時代の井戸跡などが検出されている。今回の調査においてはその調査結果を踏まえ、

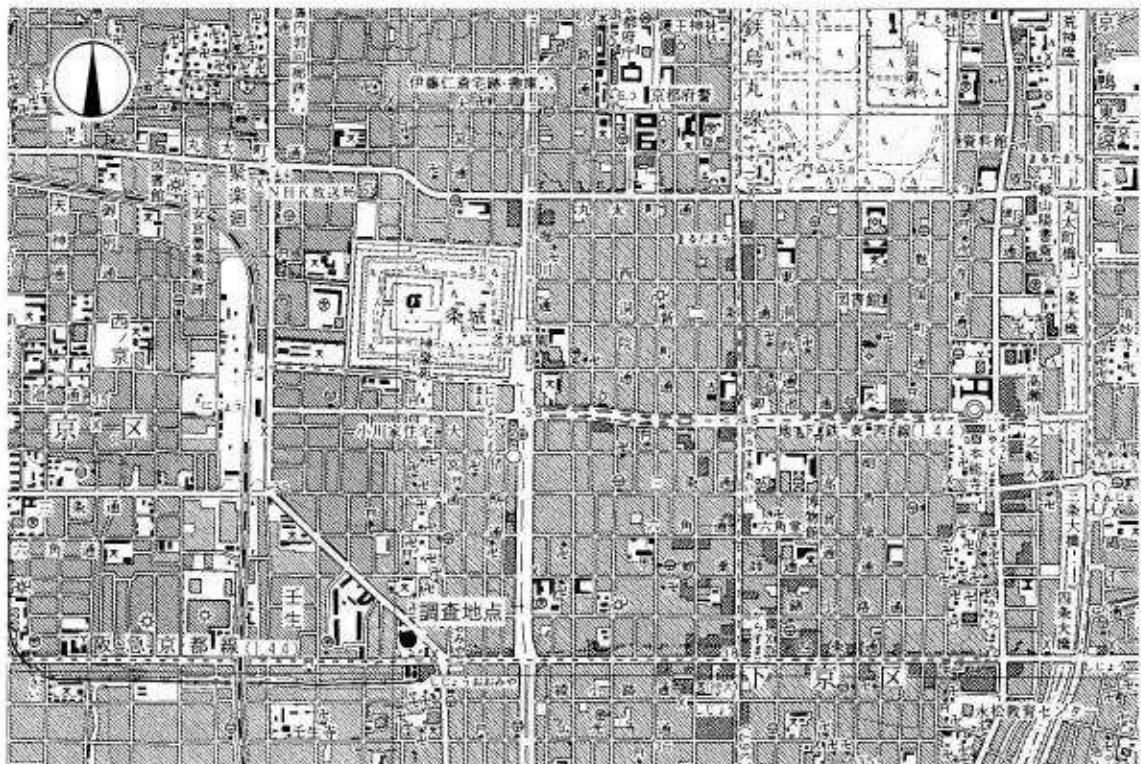


図1 調査地点位置図(1/25,000)

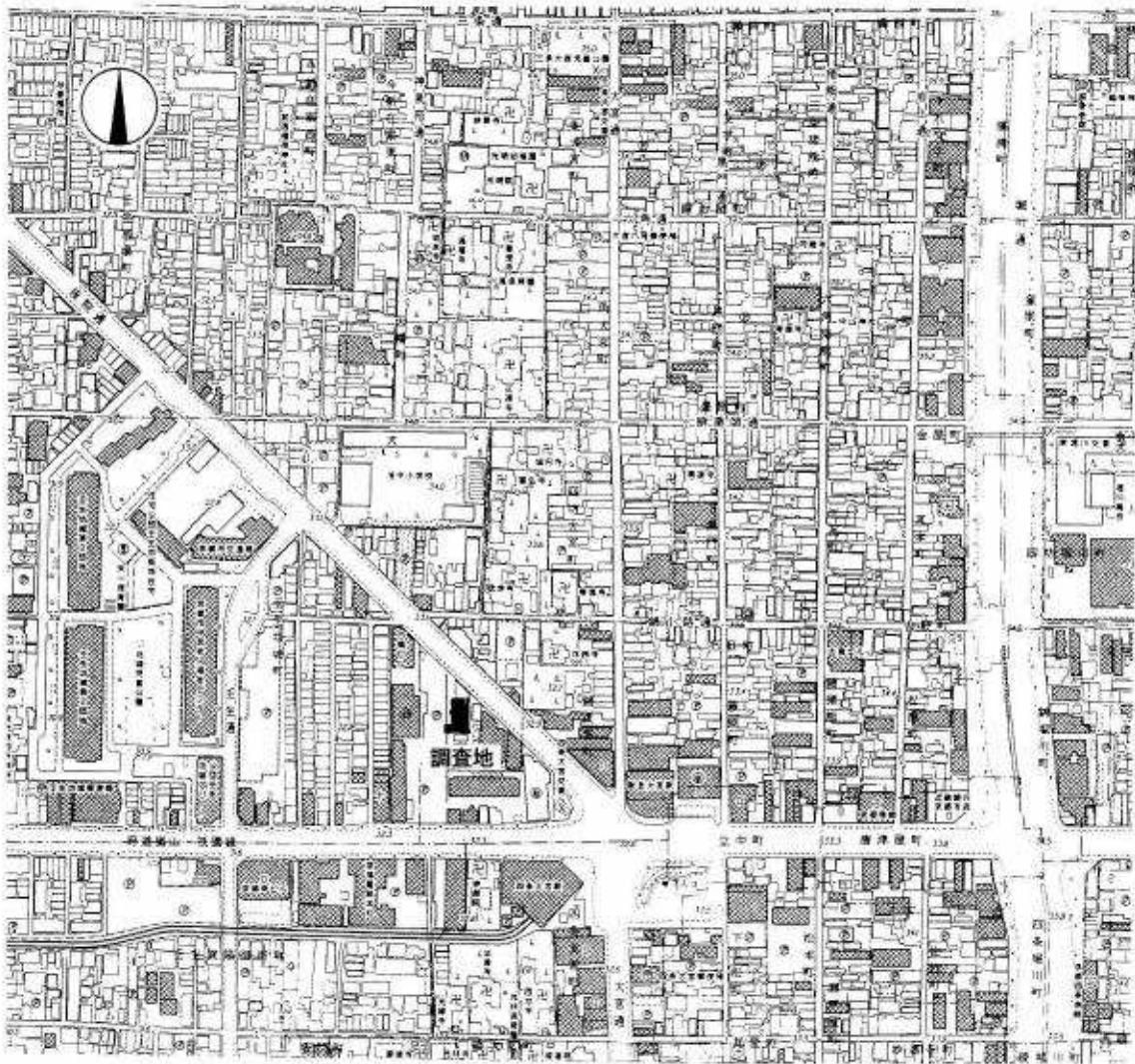


図2 調査地位置図(1/5,000)

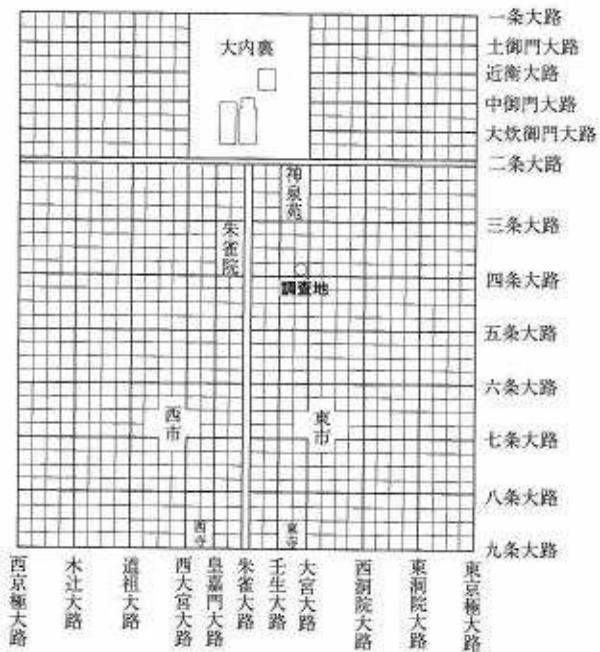


図3 平安京条坊と調査地位置図

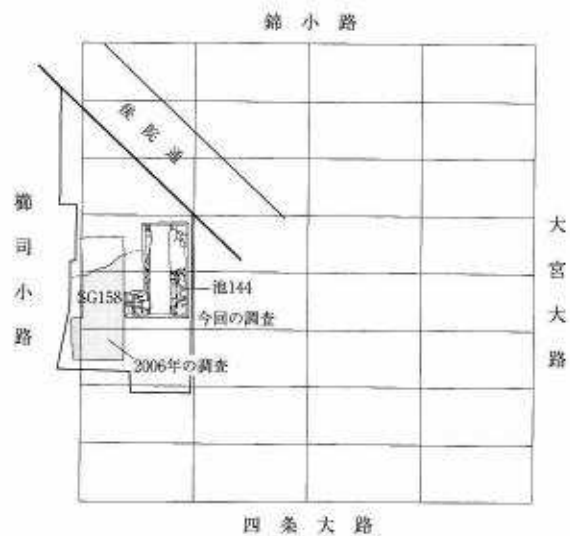


図4 四行八門と調査位置関係図(1/2,000)

平安時代前期の池跡の広がりや建物遺構の検出を主眼に調査をおこなうこととした。

文献資料によれば、この地には平安時代の12世紀前半、中納言藤原家成（1107～1154）の邸宅が存在（『仁和寺所蔵古図』）し、また権大納言中宮大夫藤原隆季（1127～1185）の邸宅があった（『山槐記』安元元年8月16日条）ようである。この邸宅は安元3年（治承元、1177）の「太郎焼亡」によって焼失している。

実際の調査は2011年2月14日から開始した。盛り土及び近現代の耕作土を機械力によって除去したのち調査に着手した。都合4面にわたる調査を4月5日までの38日間実施した結果、平安時代前期の池跡、平安時代後期の井戸、建物跡、鎌倉時代から室町時代の土壙、堀跡、江戸時代の土取跡などを検出した。調査区は東西12m、南北25mに、南西部に東西5m、南北7mの張り出し部をもつ。調査面積は計335㎡であった。

調査の方法としては、（財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点（ $X=-110,416\text{m}$ 、 $Y=-23,012\text{m}$ ）とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、4mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十三町における築地四隅の座標値（新測地系）は次のとおりである。

北西	$X=-110,370.71\text{m}$	北東	$X=-110,370.22\text{m}$
	$Y=-23,040.92\text{m}$		$Y=-22,921.54\text{m}$
南西	$X=-110,490.10\text{m}$	南東	$X=-110,489.61\text{m}$
	$Y=-23,040.44\text{m}$		$Y=-22,921.05\text{m}$

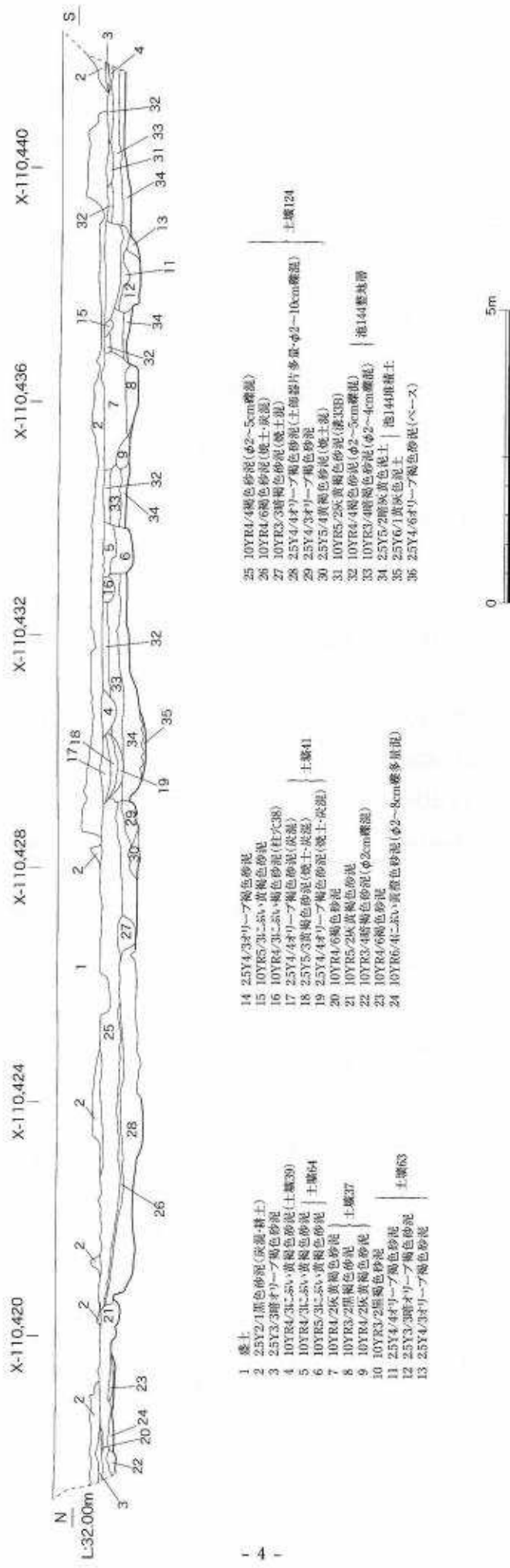


図5 東壁断面実測図 (1/100)

- 1 盛土
- 2 25Y2/1 黒色砂泥(炭混・粘土)
- 3 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 4 10YR4/3 黄褐色砂泥(土庫30)
- 5 10YR4/3 黄褐色砂泥(土庫54)
- 6 10YR5/3 黄褐色砂泥
- 7 10YR4/2 黄褐色砂泥
- 8 10YR3/2 黄褐色砂泥
- 9 10YR4/2 黄褐色砂泥
- 10 10YR3/2 黄褐色砂泥
- 11 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 12 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 13 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 14 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 15 10YR5/3 黄褐色砂泥
- 16 10YR4/3 黄褐色砂泥(柱穴混)
- 17 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(炭混)
- 18 25Y5/3 黄褐色砂泥(粘土混)
- 19 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(粘土混)
- 20 10YR4/6 褐色砂泥
- 21 10YR5/2 黄褐色砂泥
- 22 10YR3/4 黄褐色砂泥(φ2cm 礫混)
- 23 10YR4/6 褐色砂泥
- 24 10YR6/4 黄褐色砂泥(φ2-8cm 礫多量混)
- 25 10YR4/6 褐色砂泥(φ2-5cm 礫混)
- 26 10YR4/6 褐色砂泥(粘土混)
- 27 10YR3/3 黄褐色砂泥(粘土混)
- 28 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(土部部片多量・φ2-10cm 礫混)
- 29 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 30 25Y5/4 黄褐色砂泥(粘土混)
- 31 10YR5/2 黄褐色砂泥(漆混)
- 32 10YR4/4 褐色砂泥(φ2-5cm 礫混)
- 33 10YR3/4 黄褐色砂泥(φ2-4cm 礫混)
- 34 25Y5/2 暗黄褐色土
- 35 25Y6/1 黄褐色土
- 36 25Y4/6 オリーブ褐色砂泥(ベース)

- 15 10YR5/3 黄褐色砂泥
- 16 10YR4/3 黄褐色砂泥(柱穴混)
- 17 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(炭混)
- 18 25Y5/3 黄褐色砂泥(粘土混)
- 19 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(粘土混)
- 20 10YR4/6 褐色砂泥
- 21 10YR5/2 黄褐色砂泥
- 22 10YR3/4 黄褐色砂泥(φ2cm 礫混)
- 23 10YR4/6 褐色砂泥
- 24 10YR6/4 黄褐色砂泥(φ2-8cm 礫多量混)
- 25 10YR4/6 褐色砂泥(φ2-5cm 礫混)
- 26 10YR4/6 褐色砂泥(粘土混)
- 27 10YR3/3 黄褐色砂泥(粘土混)
- 28 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(土部部片多量・φ2-10cm 礫混)
- 29 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 30 25Y5/4 黄褐色砂泥(粘土混)
- 31 10YR5/2 黄褐色砂泥(漆混)
- 32 10YR4/4 褐色砂泥(φ2-5cm 礫混)
- 33 10YR3/4 黄褐色砂泥(φ2-4cm 礫混)
- 34 25Y5/2 暗黄褐色土
- 35 25Y6/1 黄褐色土
- 36 25Y4/6 オリーブ褐色砂泥(ベース)

- 1 盛土
- 2 25Y2/1 黒色砂泥(炭混・粘土)
- 3 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 4 10YR4/3 黄褐色砂泥(土庫30)
- 5 10YR4/3 黄褐色砂泥(土庫54)
- 6 10YR5/3 黄褐色砂泥
- 7 10YR4/2 黄褐色砂泥
- 8 10YR3/2 黄褐色砂泥
- 9 10YR4/2 黄褐色砂泥
- 10 10YR3/2 黄褐色砂泥
- 11 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 12 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 13 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 14 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 15 10YR5/3 黄褐色砂泥
- 16 10YR4/3 黄褐色砂泥(柱穴混)
- 17 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(炭混)
- 18 25Y5/3 黄褐色砂泥(粘土混)
- 19 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(粘土混)
- 20 10YR4/6 褐色砂泥
- 21 10YR5/2 黄褐色砂泥
- 22 10YR3/4 黄褐色砂泥(φ2cm 礫混)
- 23 10YR4/6 褐色砂泥
- 24 10YR6/4 黄褐色砂泥(φ2-8cm 礫多量混)
- 25 10YR4/6 褐色砂泥(φ2-5cm 礫混)
- 26 10YR4/6 褐色砂泥(粘土混)
- 27 10YR3/3 黄褐色砂泥(粘土混)
- 28 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥(土部部片多量・φ2-10cm 礫混)
- 29 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 30 25Y5/4 黄褐色砂泥(粘土混)
- 31 10YR5/2 黄褐色砂泥(漆混)
- 32 10YR4/4 褐色砂泥(φ2-5cm 礫混)
- 33 10YR3/4 黄褐色砂泥(φ2-4cm 礫混)
- 34 25Y5/2 暗黄褐色土
- 35 25Y6/1 黄褐色土
- 36 25Y4/6 オリーブ褐色砂泥(ベース)

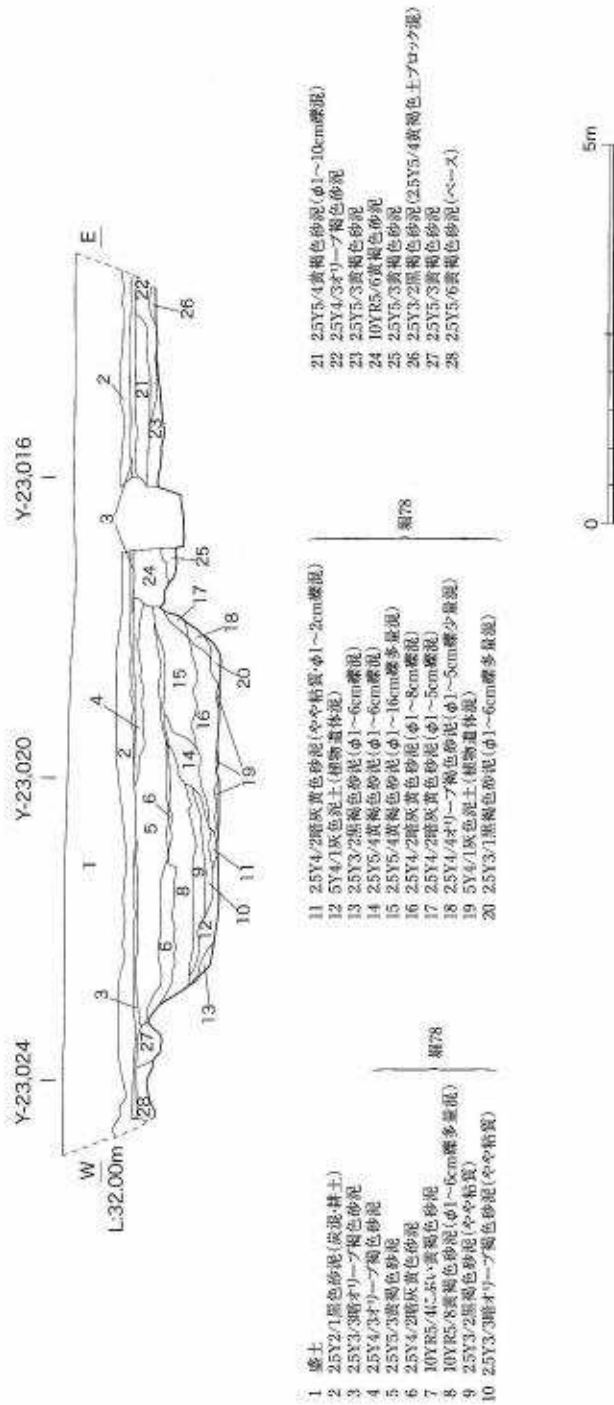


図6 北壁断面実測図(1/100)

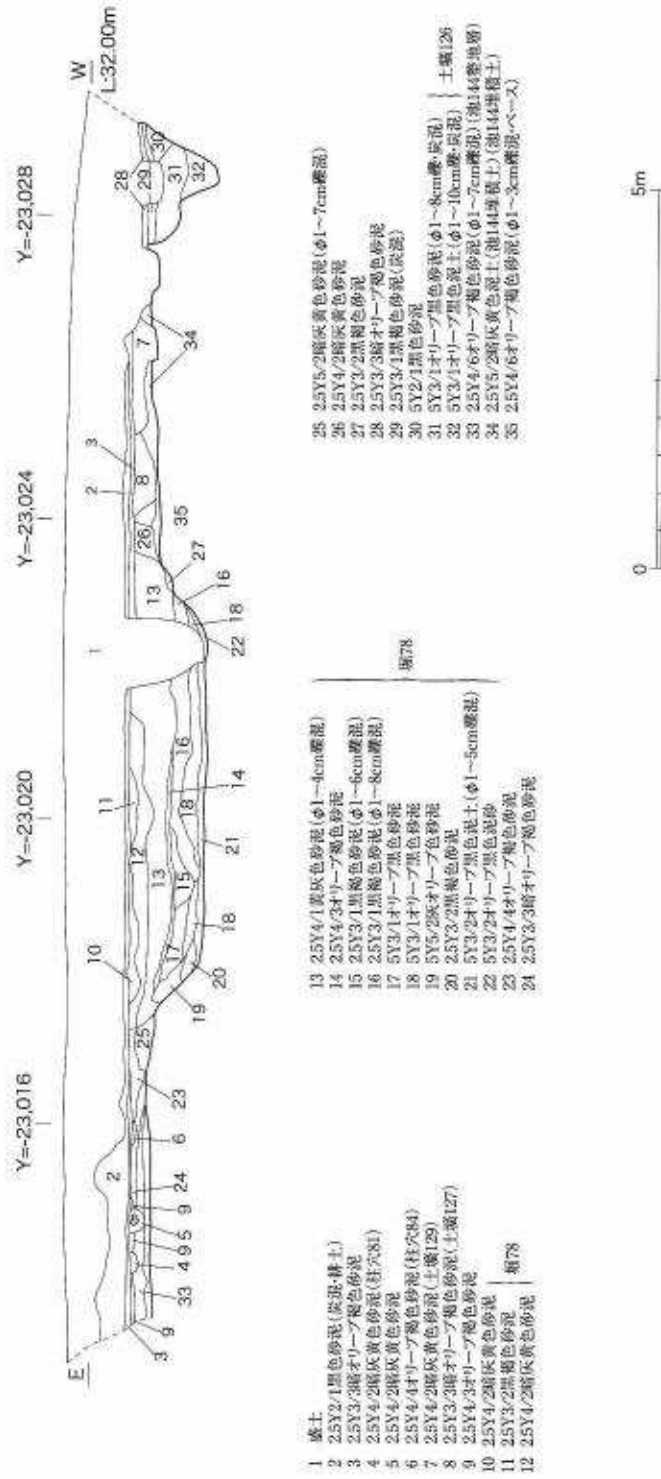


図7 南壁断面実測図(1/100)

Ⅲ 遺 構

調査地は敷地全体に盛土が0.6m程あり、その下に近現代の耕作土が0.1～0.2mの厚さである。耕作土下、調査区全体に室町時代の整地層が広がる。南東部及び南西部付近は耕作土直下に平安時代の整地層が現出し、当初から平安時代後期の遺構を認める。北端部の室町時代の整地層上面の標高は31.6m、南端部の平安時代の整地層の上面の標高は31.5mを測る。

遺構には平安時代前期から江戸時代のものがあり、遺構の総数は165基を数える。遺構の種類としては、平安時代の井戸、池、溝、掘立柱、土壙跡、鎌倉時代から室町時代の掘立柱、土壙、堀跡、そして江戸時代の土取跡などがある。以下主要な遺構について述べる。

平安時代

池 144 (図9・10、図版3・7・8)

調査区の南半部に位置する。隣接地の池(SG158-旧)の続きである。池の北肩部は江戸時代の土取跡によって削平を受けており、南半部の池の堆積土のみを確認した。池の堆積土は黄灰色ないし暗黄灰色を呈し、きわめて均質なシルトであり、腐植土などの植物遺体を含まない。堆積土は深さ0.1m程で池底はほぼ平坦に近いが、1・D区において南北幅1m、東西長2.5m以上、深さ0.4m程の凹みを一カ所検出した。その南肩部で墨書土器3が出土した。この凹みは遣り水状に東方向へ流れていく可能性がある。また、2・G区において州浜とみられる石敷き(池144B)を一部検出したが、堀78によって削平されており、全体の関係性は不明である。池の上面は厚さ0.2～0.3mの非常に堅い礫混じりの褐色砂泥層で整地されている。この整地層を除去した時点で、池の堆積土上面で動物の多数の足跡を検出した。偶蹄類とみられる痕跡を残し、牛の足跡であろう。池の堆積土からは少量の土器と瓦が出土した。平安時代前期。

土壙 154 (図9、図版3の1・6の2)

調査区の北西部西壁沿いに位置する。南北長6m、東西長1.5m以上、深さ0.5mを測る。多量の瓦を包含し、いわゆる瓦溜まり状を呈する。平安時代前期の軒瓦・土器類を多く含むが、後期の土師器皿も出土しており、時代が下がる可能性がある。

建物 1 (図9・13、図版3の1・7の2)

調査区南東隅部に位置する。東西南北各1間分のみ検出した。調査区外に続くものとみられる。掘立柱穴4基のうち柱穴32は池144の整地層上面で検出したものの、柱穴145～147は整地層を除去した段階で検出した。本来的に整地層上面で成立しているものとみられる。柱穴146は柱根の一部が残存する。各柱穴は0.25～0.4mの円形の掘形をもち、深さは0.2m程を測る。東西の柱間は1.9～2m、南北は2.2mを測る。11世紀代の土師器を含む。

建物 2 (図9・14、図版3の1・7の2)

建物1と重複する。建物1と同じく東西南北各1間分のみ検出した。東西の柱間1.95m、南北2.2mを測り、建物1と同規模で柱穴の掘形もほぼ等しい。埋土からは同時期の土師器が出土し

ており、建て替えの関係にあるとすれば建物1の柱穴146に柱根が残存することから建物2が古期と考えられる。

溝 134 (図9、図版2)

調査区の西壁沿いに位置する。幅0.5m、深さ0.2m前後の掘形をもつ南北溝である。北側は江戸時代の土壙69によって削平を受けているが、検出長17m以上で南壁外に延びる。西一行の北四門と北五門の中央付近を南北に貫く。平安時代後期。

井戸 76 (図8・15、図版1・5)

調査区の南西部に位置する。方形縦板組井戸である。一辺2mの隅丸方形の掘形をもち、木枠は一辺0.9mの方形である。縦板は大半が抜き取られているが、一部抜き取りを途中で放棄した状態を呈する。木枠内埋土完掘時には竹筒による息抜きの痕跡を認めた。井戸内下層からは箸、下駄、斎申、漆器などの多量の木製品が出土した。井戸底にのみ横棧木が良好な状態で残存し、完形品の土師器皿などが出土した。平安時代後期。

土壙 164 (図9、図版3の1・8の1)

調査区の中央東部に位置する。周辺の土壌より非常に堅く築山状を呈していたため、池144に付随するものと考えたが、断ち割りの結果、12世紀後半の平安時代後期の遺物を含み池144の堆積土の年代とは隔たりがあることが判明した。

以上の他には、柱穴81・110、土壙135～137が11世紀後半、土壙111・118・131・140、柱穴86・127・162が12世紀代の遺物を含む。

鎌倉時代から室町時代

土壙 126 (図9、図版2の2)

調査区の南西隅部に位置する。西隣接地調査の遺構の続きで全形は東西長3.2m、南北長2.6m、深さ0.8mを測る。平面は隅丸方形に近い掘形をもち、当初井戸ではないかと考えたが、掘形内には何ら施設は認められず、あるいは井戸掘りを途中で放棄した可能性があろうか。埋土は上下2層に分層でき、鎌倉時代前期の遺物を包含する。

柱穴 38 (図8、図版1)

調査区の中央部南寄りの東壁沿いに位置する。径0.5m、深さ0.2mを測る。13世紀前半の遺物を含む。

堀 78 (図8、図版1・4)

調査区中央部を南北に貫く大溝である。幅6m前後、深さ1mを測る。掘形は逆台形状を呈する。堀底は厚さ0.1m程の植物遺体を含む泥土層が堆積する。堀の上面は0.1m程の整地層を全域に施し、整地層を除去した段階で西肩部が直線状に現出した。しかし東肩部はほぼ全体に渡ってずれ落ちた状況を呈する。整地層下の第1層(北壁第8層)を除去した段階で3カ所にサブトレンチを設定し、掘底を確認した後、機械力により土砂の除去をおこなった。北壁断面の観察より、堀は東肩より埋められた(第14～18層)段階で一度再利用された様相(第8～10層)を呈す

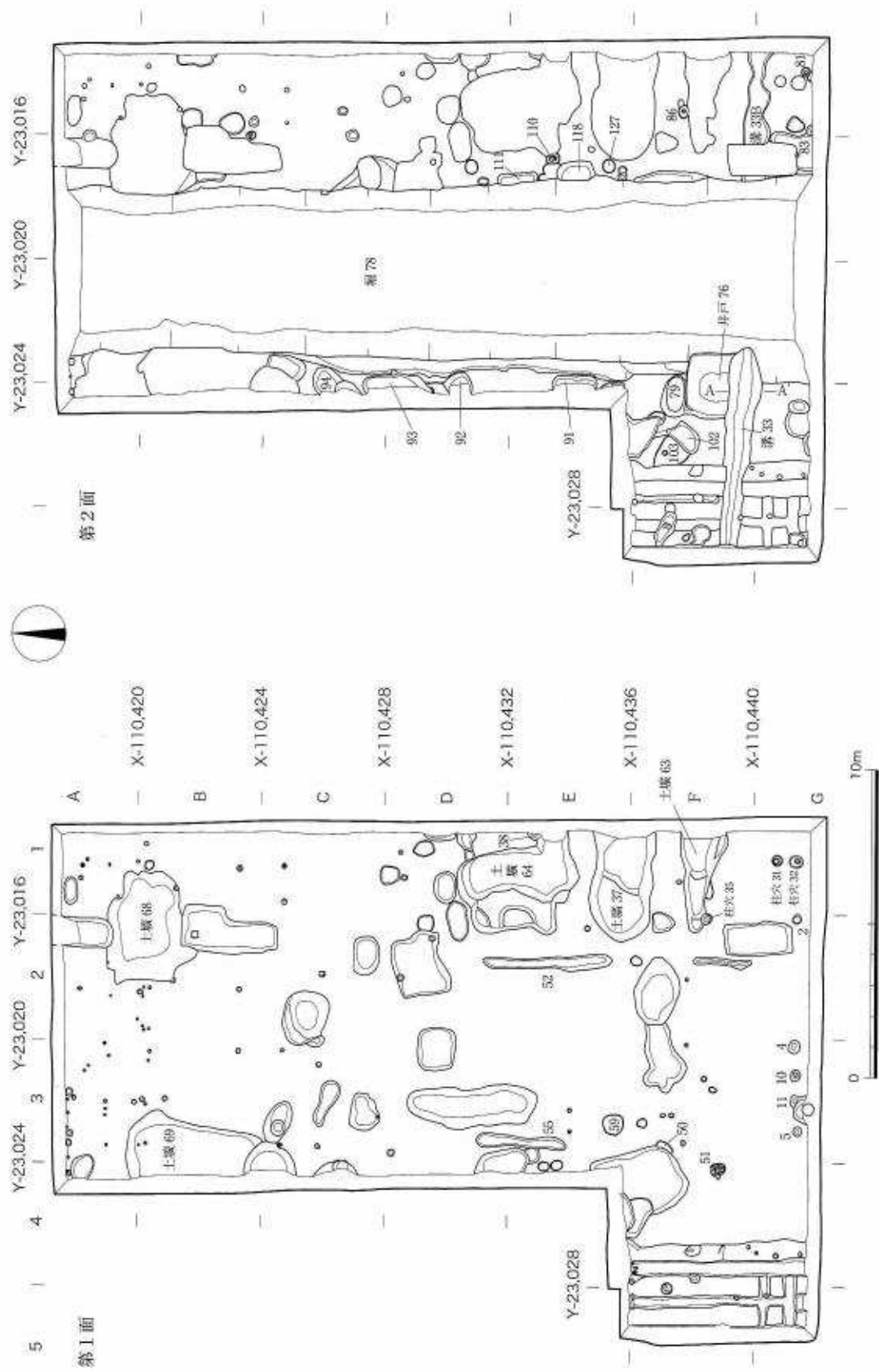


图8 第1·2面遺構実測図 (1/200)

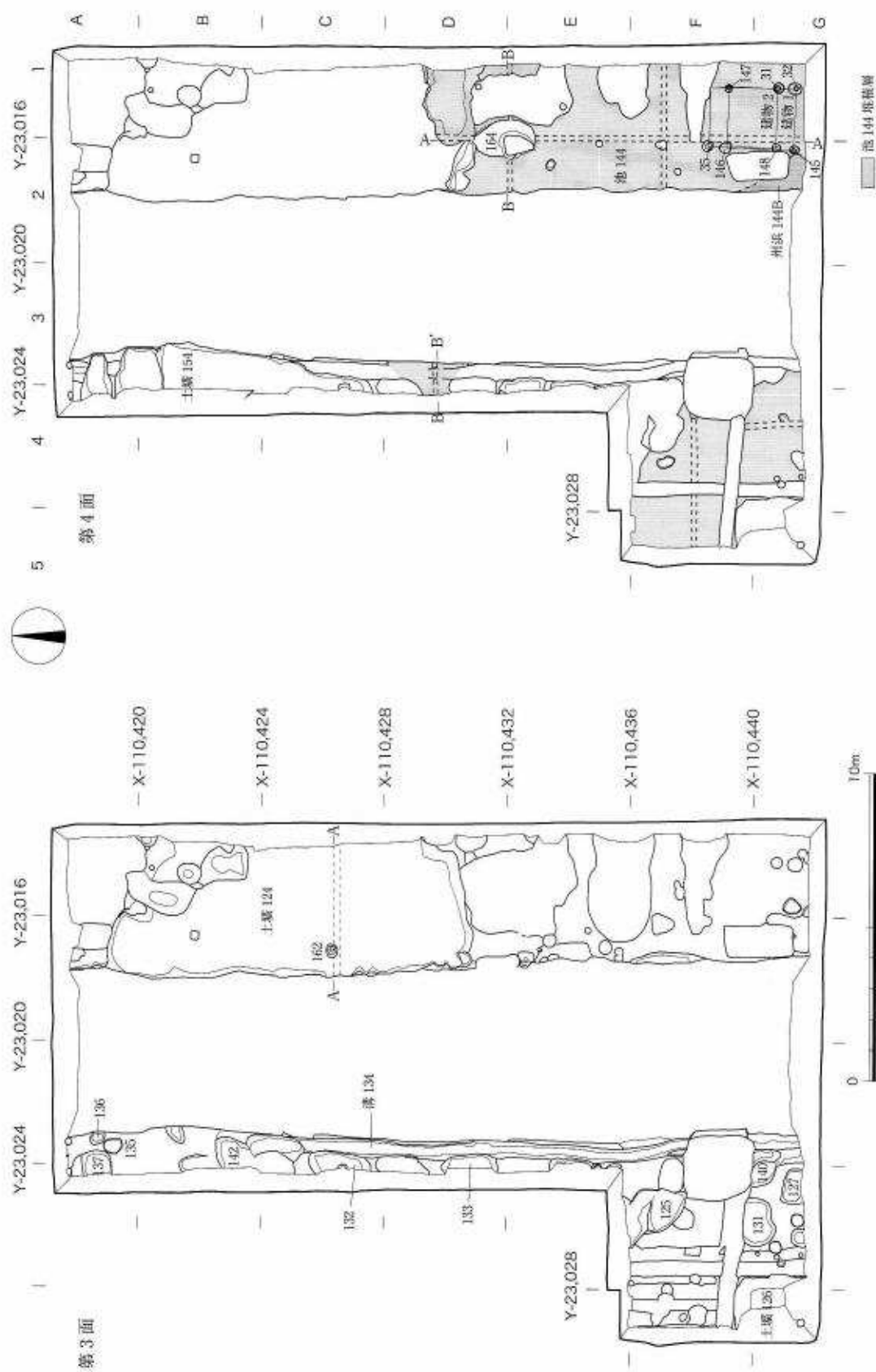


图9 第3·4面遺構実測图 (1/200)

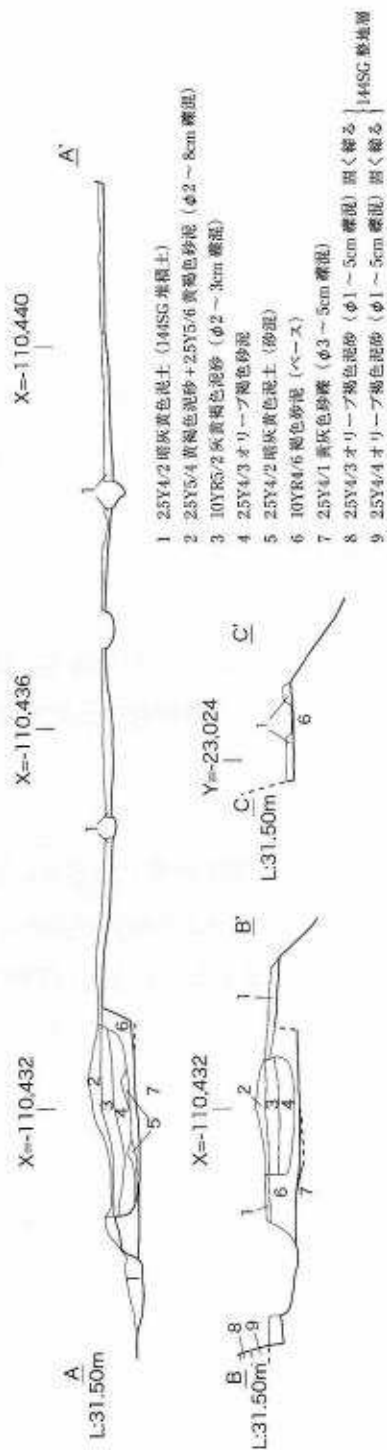


図10 池144断面実測図 (1/80)



図11 溝33断面実測図 (1/80)

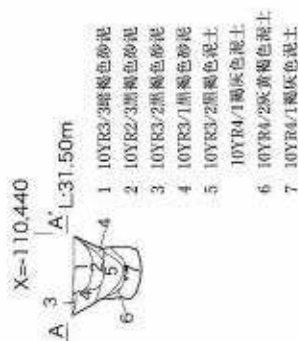


図12 土城124断面実測図 (1/80)

るが、南壁では観察されず、北壁の様相は東肩から埋め始めたもののしばらくの間堀の一部が空いたままとなっていた結果と考えられる。堀内堆積土からは12～13世紀代の土器・瓦類が大半を占めて出土したが、数パーセントの割合で16世紀代の遺物を含む。なお、第1面で検出した溝52・55は当初耕作に伴う溝と認識したが、堀78の東西両肩部であることが判明した。

溝33 (図8・11、図版1)

調査区の南西部に位置する。幅0.6～1.0m、深さ0.7mの東西溝である。西隣接地の調査で検出した溝SD148の続きである。U字溝である。最下層より6点程の完形品を含む土師器皿が集中して出土した。堀78に流れ込むものとみられ、2007年の調査で検出した堀SD115と繋がる可能性がある。堀78を挟んでこの溝の延長部に溝33Bを検出したが、溝33Bは幅0.4～0.9m、深さ0.1mを測り、やや蛇行気味できわめて浅い。室町時代後期。

土壙91～93・132・133 (図8・9、図版1・2)

調査区の西壁沿いに位置する。いずれも2m前後、深さ0.3m程の掘形をもつ。各遺構は13世紀前後の土師器を多く含むが、土壙93は室町時代の土師器を含む。これらの遺構群は堀78に付随する遺構の可能性が高い。

江戸時代以降

第1面で検出した小穴群及び杭跡は江戸時代から近代の耕作に伴うものである。柱穴4・5・10・11の並びは近代のものである。土壙37・63・64・68・69は江戸時代の土取穴である。いずれも江戸時代中期の遺物を包含する。

土壙124 (図9・12、図版2の1)

調査区北半の東部に位置する。南北長11.5m、東西長5m以上調査区外に広がる。深さ0.7mを測り、底部は砂礫層でとどまる。当初上面に大量の平安時代後期の土師器皿が認められたが、江戸時代中期の遺物を包含し、また堀78の際で掘形がとどまっていることから江戸時代の土取跡と判明した。

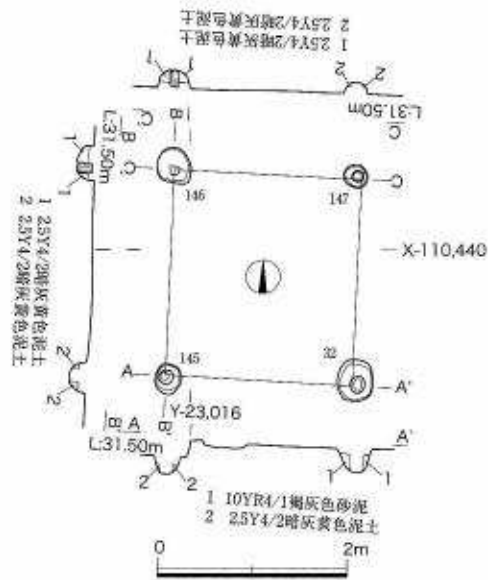


図13 建物1実測図 (1/80)

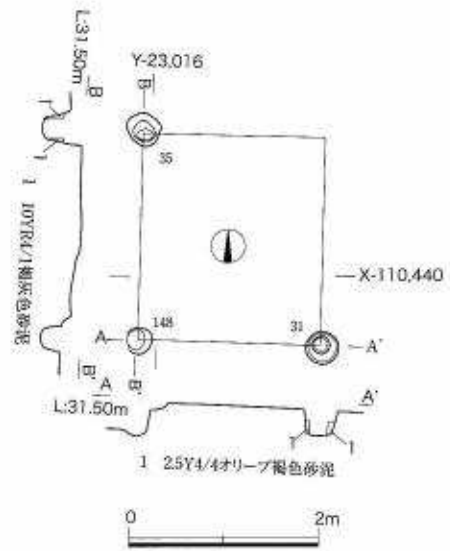


図14 建物2実測図 (1/80)

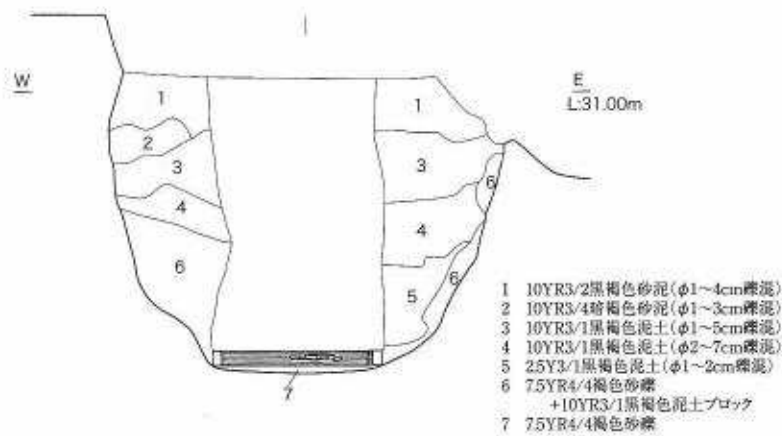
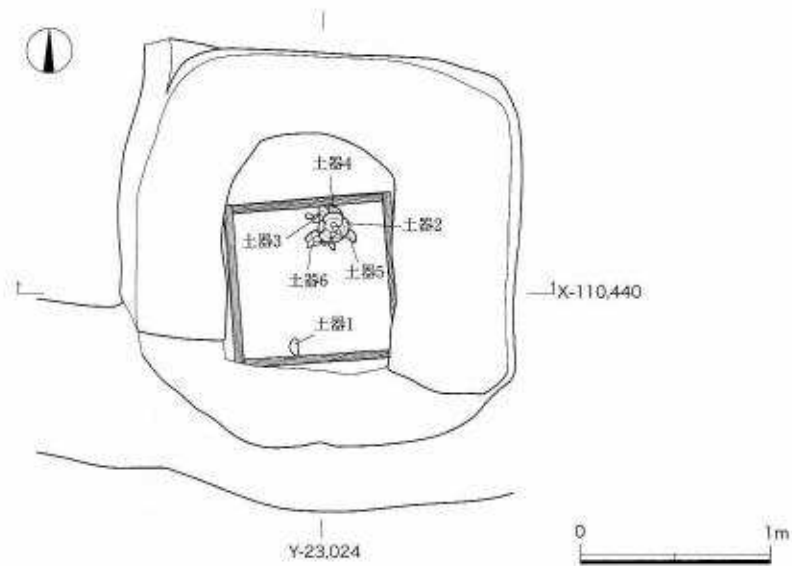


図15 井戸76実測図 (1/40)

IV 遺物

出土した遺物は整理箱に 81 箱ある。時代は平安時代前期から江戸時代のものがあり、大半が平安時代後期から鎌倉時代に属する。遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦類、土製品、石製品、木製品、金属製品などがある。以下主要な遺物について概述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年⁸³をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

池 144 出土土器 (図 16、図版 8 の 2・9・10)

土師器碗 A (1・2)、須恵器鉢 (3)、土錘 (6) がある。1 は口径 13.6cm を測り、外面は指押さえ痕が明瞭に残る。e 手法である。胎土は橙色を呈する。2 は口径 16.0cm、器高 3.6cm を測り、口縁端部が内側に小さく肥厚する。外面全体を丁寧にヘラ削りする。赤褐色を呈する。3 は屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は平坦にナデつける。口径 20.6cm を測る。体部外面に墨書が認められ、「□方御□」と読める。6 は須恵質である。外面は凹凸があり、棒を通した粘土塊を手中で握り成形したものとみられる。両端をヘラ状のもので切り取る。高さ 5～5.5cm、最大幅 3.5cm、孔の径 1.2cm を測る。2・F 区の上面整地層からは土師器皿 A (4・5) が出土している。4 は口径 9.2cm、5 は口径 10.2cm を測る。池 144 堆積土出土遺物は I 期新の 9 世紀前半、整地層出土土器は IV 期の 11 世紀代に属する。

土壌 154 出土土器 (図 17、図版 9)

大量の瓦類と共に少量の土器類が出土している。須恵器鉢 (7)、緑釉陶器 (8・9)、灰釉陶器 (10)、土師器皿などがある。7 の口縁部は玉縁状を呈し、口縁下にくびれをもつ。8 は貼り付けの輪高台で内外面を丁寧にヘラ磨きする。釉はうぐいす色、胎土は灰白色を呈する。9 は円盤状の切り高台をもつ。胎土はセピア色を呈し、釉は暗緑色、内外面のヘラ磨きは粗い。10 は底部外面糸切り痕が残る。高台は貼り付け輪高台で、やや内彎する断面三角形を呈する。胎土は

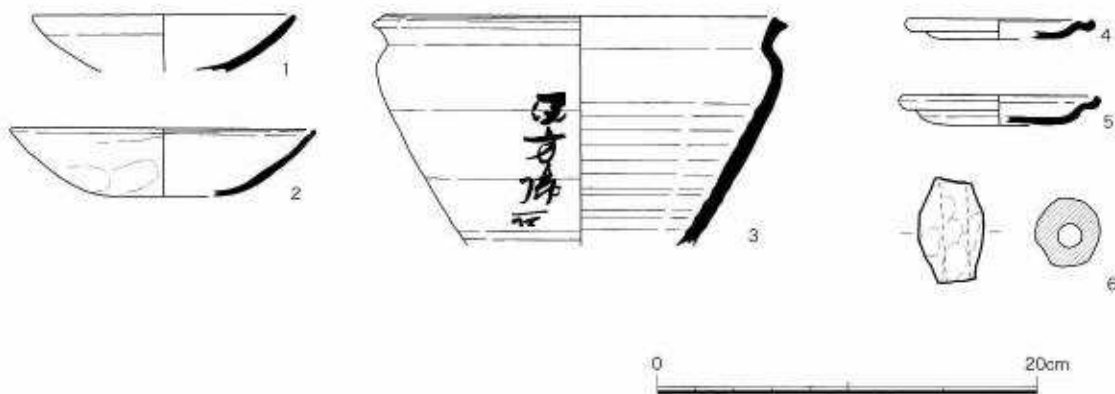


図 16 池 144 (1～3・6)・池 144 整地層 (4・5) 出土遺物実測図 (1/4)

灰白色である。釉は体部内面のみ認める。

井戸 76 出土土器 (図 18・図版 9)

土師器皿 (11～21、23～38)、白磁碗 (22) などがある。11～22 は上面第 1 層出土、23～34 は木柵内最下層出土、35～38 は掘形出土である。土師器皿には皿 Ac (16) と皿 N があり、皿 N には大小がある。16 は口径 10.0cm 程を測る。皿 N の大 (17～21、31～34、36～38) は口径 14.0～15.4cm、器高 2.0～8cm を測る。小 (11～15、23～30、35) は口径 9.5～10.4cm、器高 1.3～1.9cm を測る。いずれも口縁端部は丸くおさめる。11 は完存品、32 はほぼ完形品である。白磁碗 (22) の体部下半以下は釉はなく、黄味色を帯びる。胎土はやや焼きが甘い。これらの土器群は掘形を含め 12 世紀代の V 期に属する。

土壌 126 出土土器 (図 19)

土師器皿 (39～43)、瓦器碗・壺 (44・45)、山茶碗 (46) がある。土師器皿 N は大 (42・43) と小 (39～41) がある。44 は瓦器碗、口縁部内面に一条の沈線を施す。45 は瓦器壺である。底部はヘラ切り離し、体部外面は平滑である。46 は胎土が粗い。高台は断面三角形を呈する。13 世紀前半の VI 期中に属する。

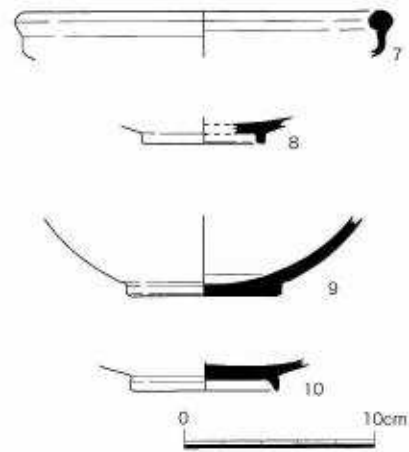


図 17 土壌154出土遺物実測図(1/4)

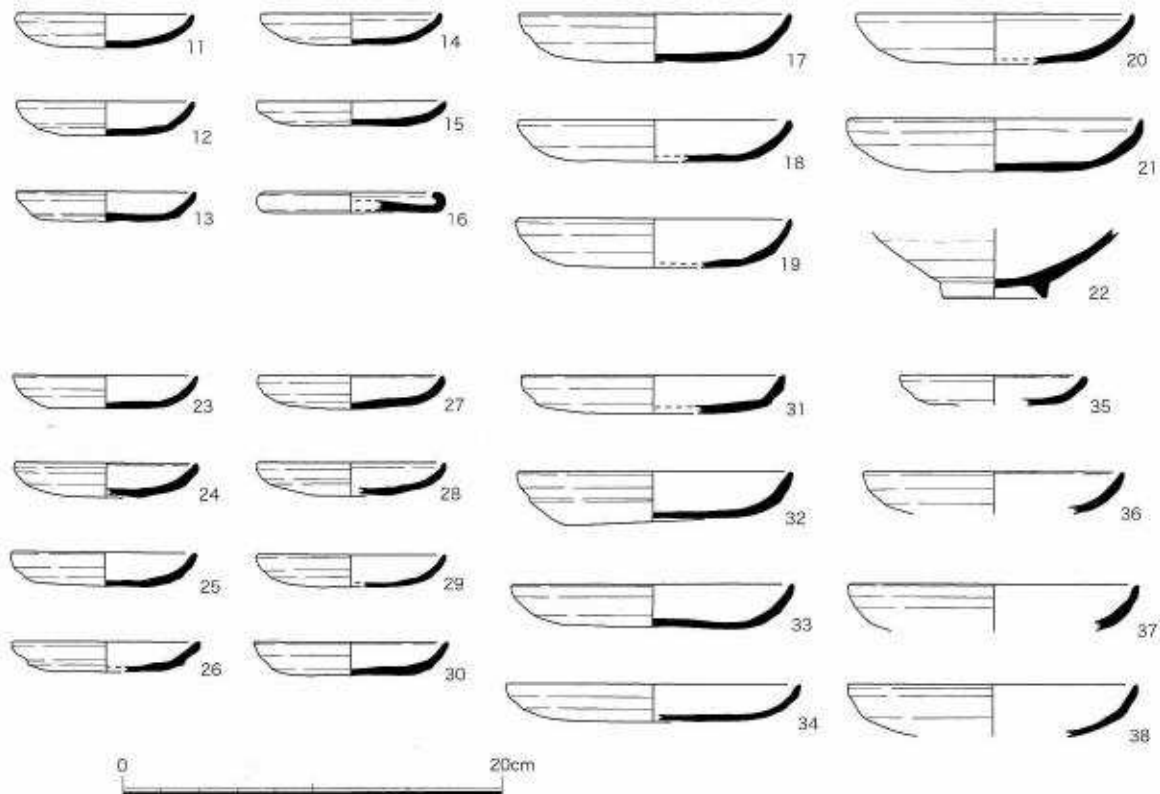


図 18 井戸76出土遺物実測図(1/4)

溝 33 出土土器 (図 20・図版 10)

4・F 区の最下層よりまとまって出土した。赤色系の土師器皿 N (47～50) と白色系の皿 S (51～55) がある。皿 N は口径 7.5～7.7cm、器高 1.5～1.9cm を測る。皿 S は口径 11.4～16.3cm、器高 2.2～3.0cm を測る。16 世紀前半の X 期古に属する。

堀 78 出土土器 (図 20・図版 10)

土師器皿 S (56)、施釉陶器皿 (57)、瓦器鍋 (58)、白磁碗 (59)、播鉢 (60)、天目茶碗 (105) などがある。56 は口径 9.8cm、器高 1.4cm を測る。57 は瀬戸系陶器皿、105 は美濃瀬戸系の天目茶碗である。58 は退化した口縁部をもつ。59 は幅広のしっかりした高台をもち、高台部以下は釉は無し。釉は黄色味を帯び、胎土は精緻で硬い。60 は信楽系播鉢である。内面に五条の櫛目を施す。16 世紀前半代の X 期古～中の様相を呈する。図化はしなかったが、12～13 世紀代の土器類・瓦類が大半を占め、16 世紀代の土器類は非常に少ない。

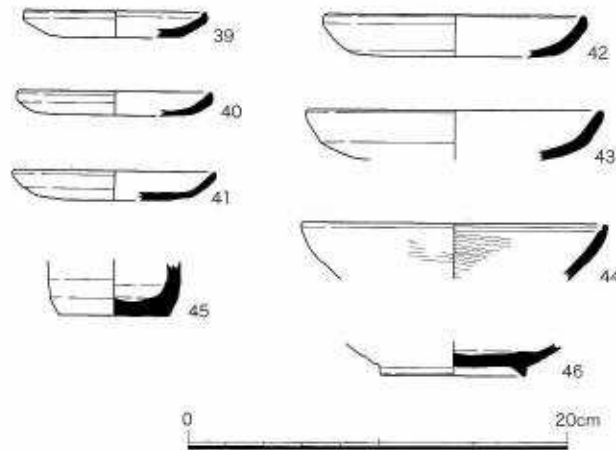


図19 土城126出土遺物実測図(1/4)

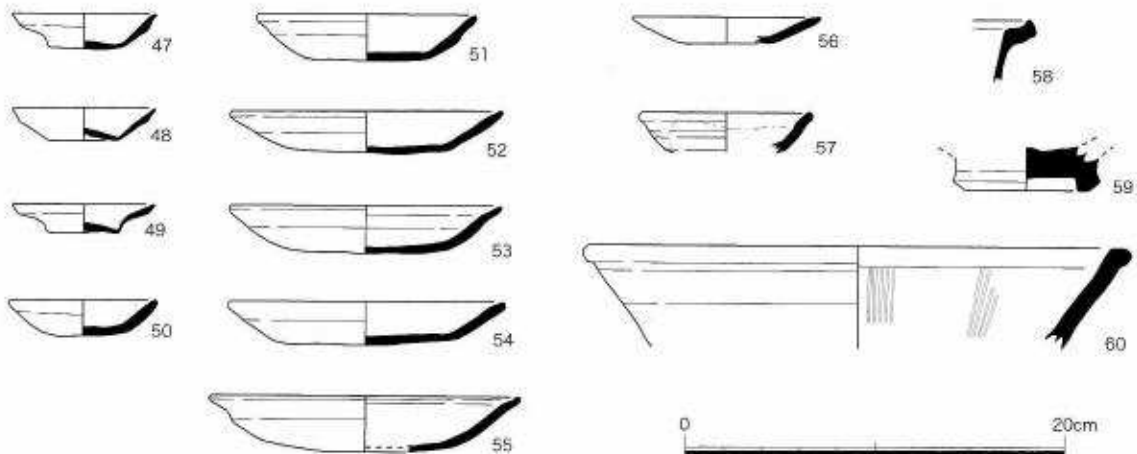


図20 溝33(47～55)・堀78(56～60)出土遺物実測図(1/4)

瓦類 (図 21 ~ 25、図版 11 ~ 14)

京域ではあまり例を見ない程多くの瓦類が出土した。軒瓦は 40 点程あり、その内土壙 124 からは軒瓦の半数近くが出土した。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (61)

土壙 124 出土。2 重圏線圏の外側に凸鋸齒文縁を施す。弁端が尖り、中房に 1 + 8 の蓮子を配す。丸瓦部はタテ方向のヘラ削りを施す。胎土は精良である。平城宮式 6225A 型式である。

単弁蓮華文軒丸瓦 (62)

土壙 124 出土。弁は二十葉、中房の蓮子は 1 + 5 であろう。摩滅が著しい。胎土は灰白色で 5 mm 程の砂粒を含む。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (63 ~ 67)

いずれも同文の東寺系軒丸瓦^{註4}である。63 は土壙 124 出土。「大伴」銘をもつ瓦である。凸形中房の円形界線を巡らした中に「大」字の一部が認められる。花卉の輪郭がシャープである。2 重圏線の内側の圏線が花卉に合わせるように波打つ特徴をもつ。外面は黒灰色を呈し、胎土は灰色、白色砂粒を多量に含む。64 は土壙 154 出土。中房部が 63 より突出し、蓮子は無く円形界線は認められない。範はややだれた感じである。全体が灰白色を呈し、砂粒を含む。65 は土壙 69 出土。中房は界線が認められ 63 にちかい。銘は判然としない。外面は灰白色、胎土は黒灰色を呈し、白色砂粒を多く含む。66 は土壙 154 出土。64 と同じく灰白色を呈し、砂粒の含有量も似る。67 は池 144 堆積土層 (3 ~ 4・C ~ D 区) より出土。外面は黒灰色、胎土は灰白色で白色砂粒を多く含む。以上の 5 点の他に図化に至らなかったものが 2 点ある。池 144 堆積土 (2・E 区) 出土のものと土壙 124 出土のものがある。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (68)

土壙 68 出土。『木村捷三郎収集瓦図録』^{註5}(以下「木村瓦図録」とする) 966 のオウセンドウ廃寺出土と同文。瓦当裏面に布目が認められる。いわゆる一本造り。全体に灰白色を呈し、胎土は砂粒を含む。

単複重弁六葉蓮華文軒丸瓦 (69)

堀 78 出土。『木村瓦図録』778 と同文。単弁の上に複弁を重ね、凹形の中房に 1 + 4 の蓮子を配す。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。

単弁四葉蓮華文軒丸瓦 (70・71)

土壙 124 出土。『木村瓦図録』石清水八幡宮出土瓦と同文。花卉が退化した文様である。70 は瓦当裏面に指押さえ痕が顕著に残る。いずれも外面は黒灰色、胎土は灰白色を呈しやや粗い、微砂粒を含む。池田瓦窯跡^{註6}より同種のものが出土している。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦 (72・73)

72 は柱穴 38 出土、73 は 1・A ~ C 区精査中出土。瓦当面は楕円形を呈する。中房に 1 + 5 の蓮子を配す。72 は暗灰色、73 は黒灰色を呈し、砂粒を含む。

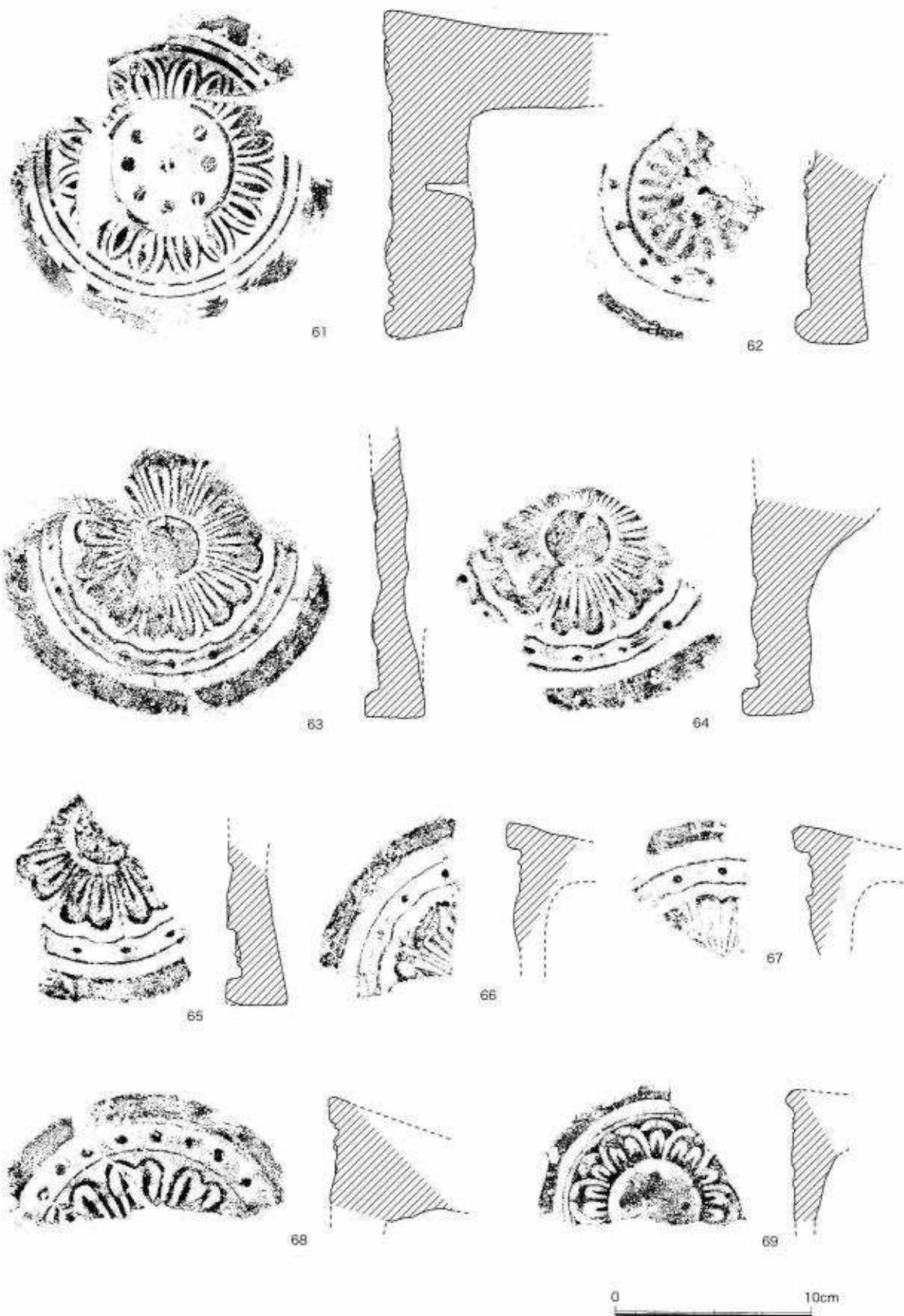


图21 軒瓦拓影·实测图(1/3)

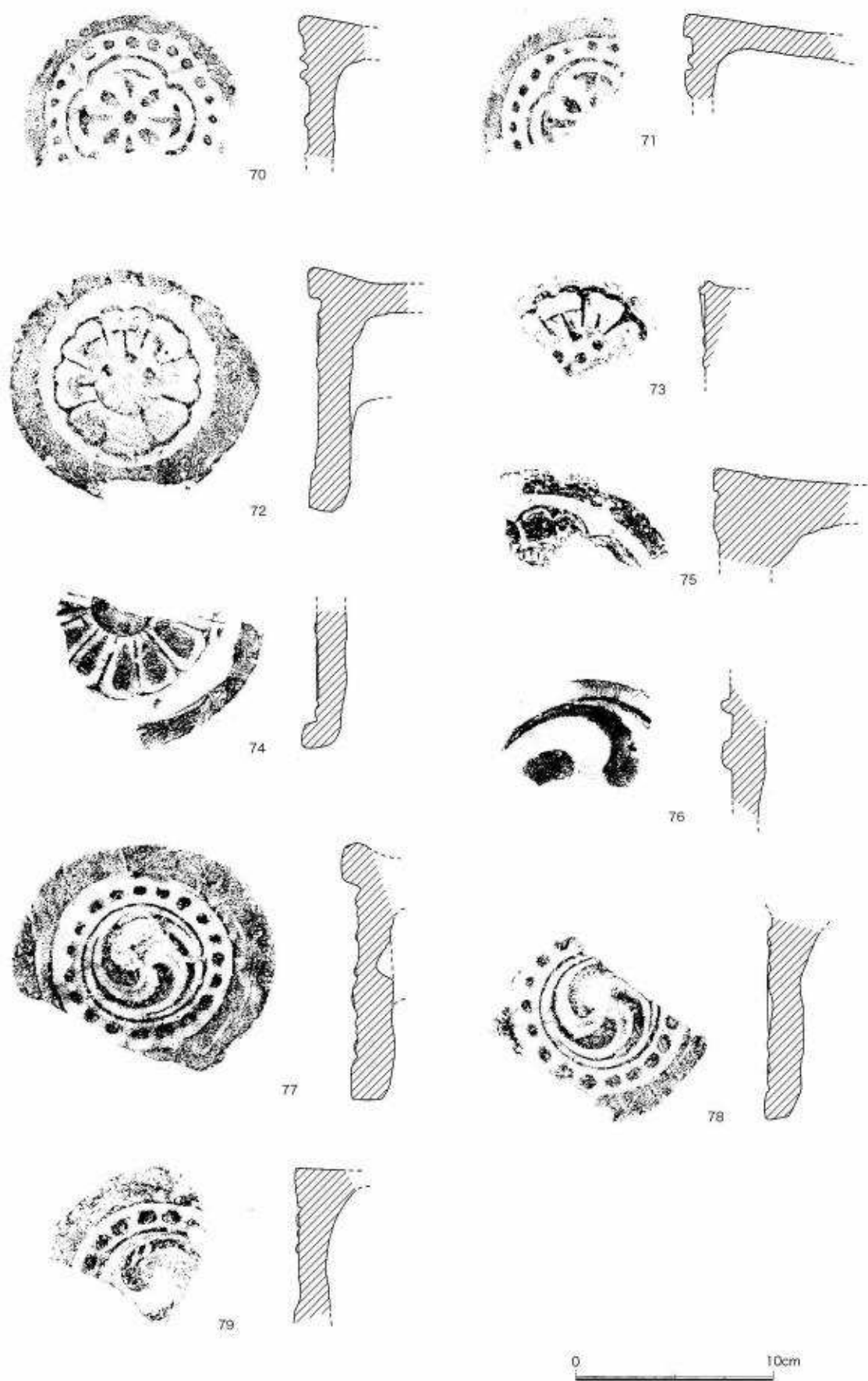


图22 軒瓦拓影·实测图(1/3)

単弁十二葉蓮華文軒丸瓦 (74)

土壙 124 出土。凸形の中房に 1 + 4 の蓮子を配し、外区に 6 個の珠文を配す。瓦当裏面指押さえ痕残る。黒灰色を呈し、やや焼成が甘い。栢杜遺跡八角円堂より同文が出土。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (75)

土壙 69 出土。「木村瓦図録」1146 と同文。丸瓦凸面はタテ方向の削り。暗青灰色を呈し、砂粒を含む。播磨産。

三巴文軒丸瓦 (76)

土壙 131 出土。右巻きの三巴文である。頭部は離れ、尾部は互いに接する。周縁部を欠く。黒灰色を呈し、微砂粒を含む。

三巴文軒丸瓦 (77 ~ 79)

77・78 は土壙 124 出土。79 は土壙 37 出土。いずれも頭部は互いに離れ、尾部は接しない。77 は外区に 19 個の珠文を配し、瓦当面はやや楕円形を呈する。瓦当裏面の周縁部は削りをおこなう。78・79 は二次焼成を受けている。

均整唐草文軒平瓦 (80)

土壙 124 出土。重圏線縁均整唐草文軒平瓦である。平城宮式 6663-C である。6663 平城宮跡で数多く検出されており、A ~ I の 9 種類程の型式が確認されているが、C は左第 2 単位第 1 支葉が逆になっている特徴がある。外面は黒灰色、胎土は灰色を呈し、白色微砂粒を多く含む。

均整唐草文軒平瓦 (81 ~ 83)

81・83 は土壙 124 出土、82 は土壙 154 出土。いずれも中央の方形区画の中に「大伴」銘を配す。軒丸瓦 63 とセットになる。瓦当上端部の平瓦凹面端部は 3 ~ 4cm 幅でヨコ方向の削りを施す。平瓦部凸面部はタテ方向のヘラ削りをおこなう。外面は灰白色ないし暗灰色、胎土は灰白色で白色微砂粒を多く含む。このほかに図化できなかつたものが土壙 154 より 1 点出土している。

剣頭文軒平瓦 (84)

土壙 124 出土。瓦当上端部及び顎部はヨコ方向の削りをおこなう。瓦当面に布目痕残る。裏面は折り曲げに伴う粘土しわが残る。胎土は灰色、白色微砂粒を多く含む。折り曲げ式。

剣頭文軒平瓦 (85)

土壙 124 出土。範が浅い。平瓦部凹面はタテ方向に板ナデをおこなう。外面は黒灰色、胎土は灰白色を呈し、精良である。半折り曲げ式。

剣頭文軒平瓦 (86)

土壙 124 出土。白色砂粒を多く含む。焼成はやや甘い。折り曲げ式。

剣頭文軒平瓦 (87)

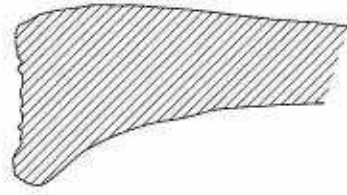
堀 78 出土。瓦当上端部をヨコ方向の削りをおこなう。瓦当面に布目痕残る。折り曲げ式。胎土は灰色、微砂粒を含む。

剣頭文軒平瓦 (88)

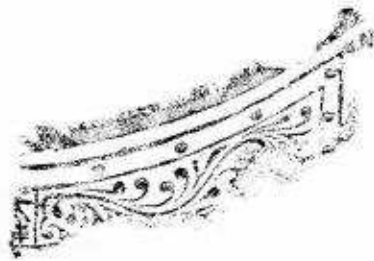
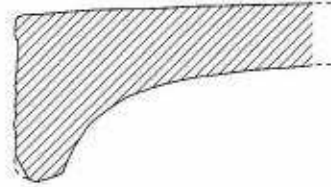
柱穴 38 出土。単弁状の剣頭文をもつ。顎部及び側面は削り。85 と同じく範が浅く、平瓦部凹



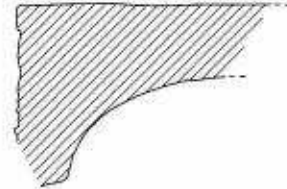
80



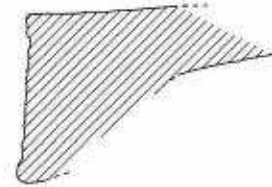
81



82



83



0 10cm

图23 軒瓦拓影·实测图(1/3)

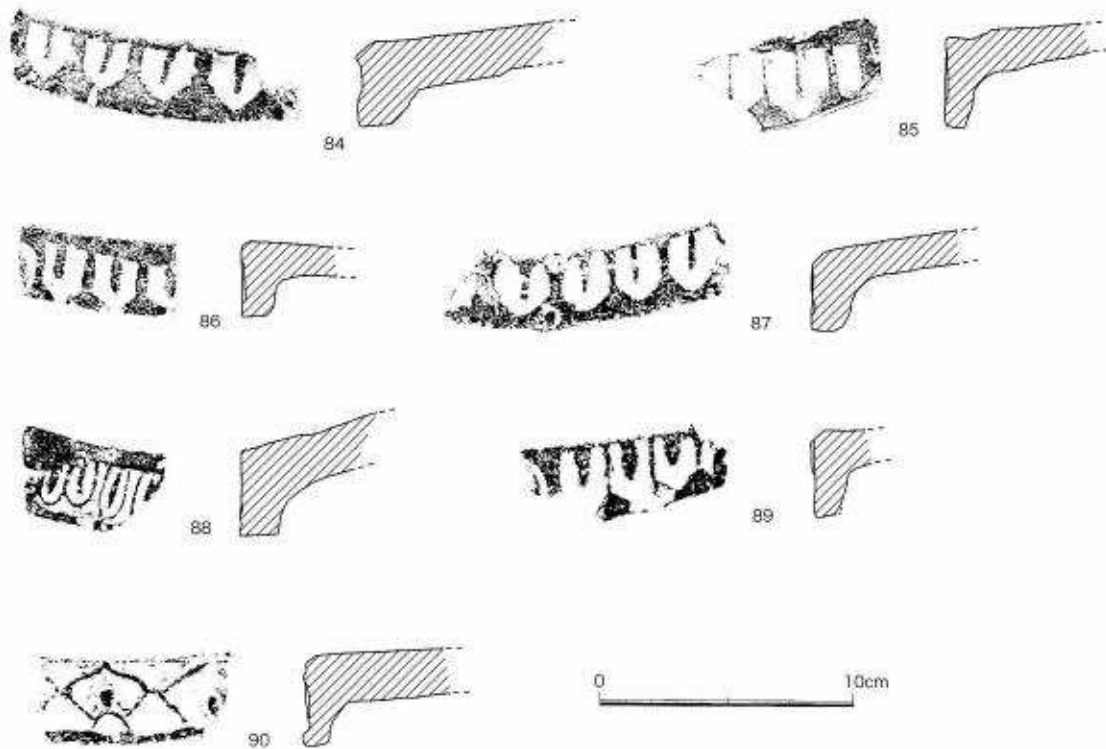


図24 軒瓦拓影・実測図(1/3)

面は板ナデをおこなう。半折り曲げ式。外面は暗灰色、胎土は灰白色を呈する。幡枝窯産。

剣頭文軒平瓦 (89)

堀 78 (溝 55) 出土。中央に巴文を配する。瓦当上端部をヨコ方向に削る。瓦当面に布目痕残る。折り曲げ式。

花文軒平瓦 (90)

柱穴 59 出土。瓦当上端部ヨコ方向の削り。瓦当裏面指押さえ。折り曲げ式。

刻印瓦 (91)

池 144 整地層出土。平瓦凹面に「理」の刻印がある。刻印部分の布目をナデ消した後に刻印を施す。凸面は縄目タキ。胎土は灰白色を呈し精良、白色微砂粒を含む。搬入瓦である。

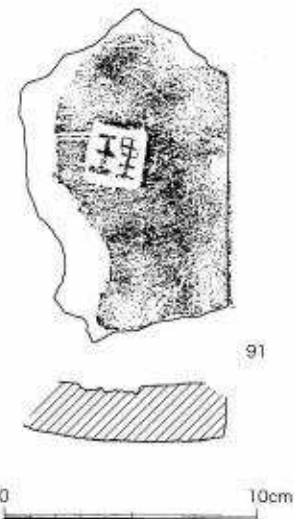


図25 刻印瓦拓影・実測図(1/3)

木製品 (図 26、図版 15)

井戸 76 の木枠内下層より多数の木製品が出土した。

齋串 (92 ~ 94)

92 は長さ 42.6cm、幅 1.7cm、厚さ 0.7cm、93 は残存長 19.7cm、幅 1.5cm、厚さ 0.3cm を測る。

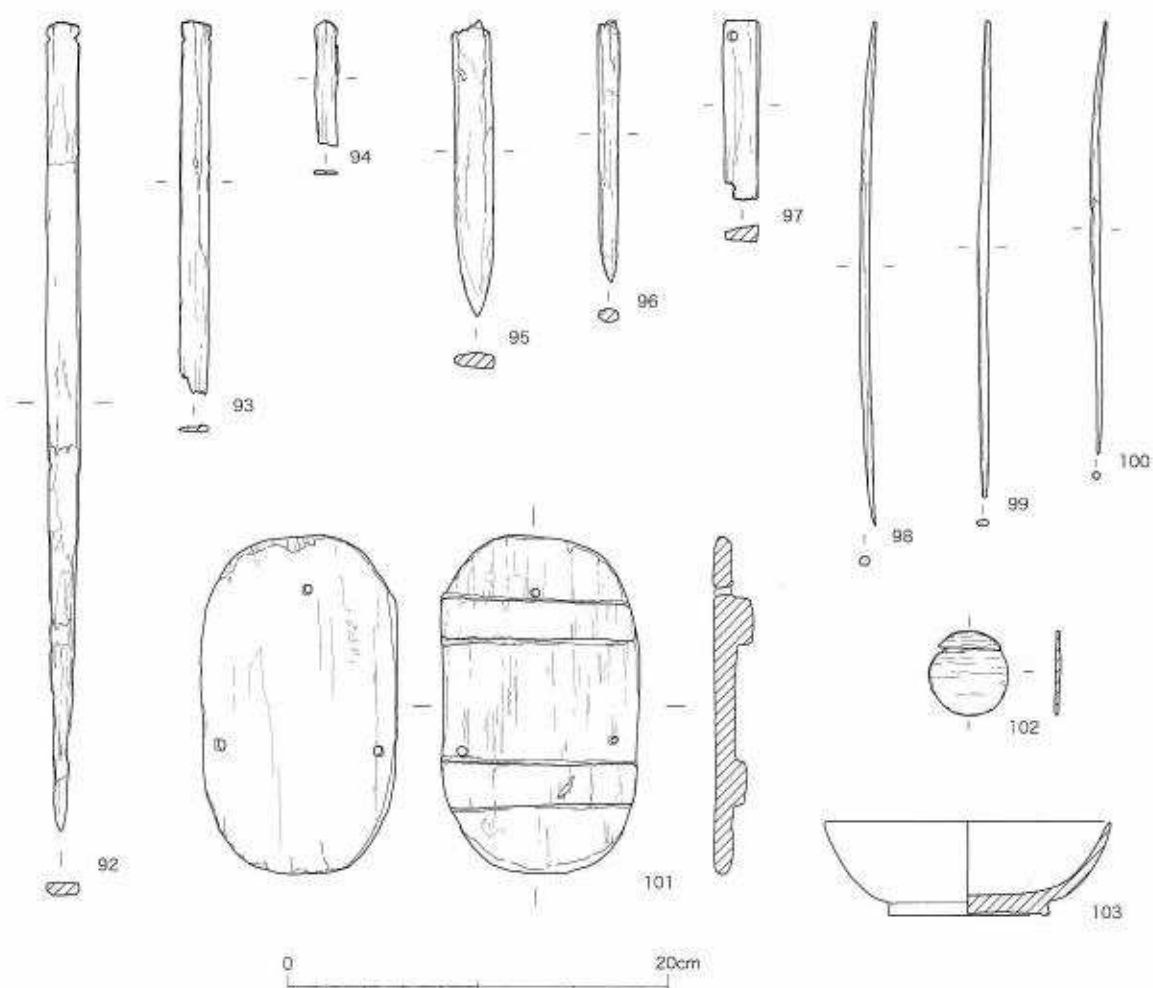


図26 井戸76出土木製品実測図(1/4)

ともに圭頭状をなし、上端近くの両側縁に三角形の切り抜きを入れる。93は上半中央部に孔を穿つ。94は残存長6.6cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。圭頭状をなし、上端近くの両側縁に切り込みを入れる。

形代 (95・96)

95は残存長15.7cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm、96は残存長13.8cm、幅1.1cm、厚さ0.7cmを測る。ともに先が尖り刀子状を呈する。

加工木 (97)

残存長9.5cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmを測る。上端近くに径0.5cmの孔を穿つ。用途不明。

箸 (98～100)

98は長さ26.5cm、径0.5cm、99は長さ25.2cmを測り、断面は幅0.6cm、厚さ0.3cmの楕円形を呈する。100は長さ22.8cm、径0.4cmを測る。

下駄 (101)

長さ17.8cm、幅10.5cm、残存高2.1cmを測る。形状は楕円形を呈する。

曲物 (102)

円形曲物の底板。径 4.2cm、厚さ 0.25cm を測る。

漆椀 (103)

黒漆椀である。ほぼ完形品である。口径 15.1cm、器高 5 cm を測る。

石製品 (図 27、図版 10)

砥石、石鏃などがある。

石鏃 (104)

池 144 整地層より出土。凹基式で、先端部を欠く。材質はチャート、暗緑灰色を呈する。

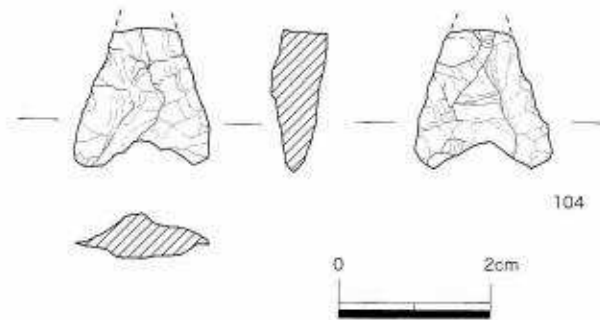


図27 池144整地層出土遺物実測図(1/1)

	Aランク点数 (箱数)	内訳	Bランク 箱数	Cランク 箱数	出土箱数 合計
点数及び 箱数	105点 (9箱)	土師器 46点、須恵器 2点、緑 釉陶器 2点、灰釉陶器 2点、 白磁 2点、陶磁器 3点、瓦器 3点、瓦 31点、木製品 12点、 石製品 1点、土製品 1点	75箱	0箱	84箱

遺物概要表

V 小 結

今回の調査においては、当初平安時代前期の庭園遺構の広がり、建物遺構の検出を主眼としておこなったが、予想に反して調査区中央を南北に貫く室町時代後期の大溝（堀 78）を検出した。西隣接地で検出された平安時代前期の池（SG158-旧）の広がり、調査区南半部において同時期の池の堆積土（池 144）の続きを認めたものの調査区北部に想定される岸辺部分は江戸時代の土取跡などによって削平を受けていることが判明し、明確な汀線の広がりを確認することはできなかった。池 144 の堆積土の出土土器類は 9 世紀前半の I 期新に属するもので、池 144（池 SG158-旧）の成立時期はその頃まで遡るものと考えられる。

出土遺物については平安京城においてはあまり類をみない程多量の瓦類が出土した。それらの中に平安前期から鎌倉時代にかけての軒瓦が 40 点程あり、しかもその中に「大伴」銘の瓦が 10 点余り含まれるなど貴重な発見となった。また調査区全域において、11 世紀後半から 13 世紀代にかけての土器類が多量に出土したが、それらの大半が室町時代以降の遺構に混入した状況を呈し、江戸時代の土取跡（土壙 124）なども当初平安時代後期の土器溜りと見誤る程であった。このような土器類の出土状況は当地の文献に登場する藤原家成や藤原隆季の邸宅の時代と重なり、井戸 76 をはじめとする当時の土地利用の頻繁な状況をうかがわせる。しかしそれらに伴う建物遺構は後世の堀 78 や土取跡などによって広範囲に削平されており検出できなかった。調査区南東部で検出した建物 1・2 は 11 世紀代のものでそれらの時代にやや先行する遺構である。

堀 78 について

2007 年に 20m 程離れた南西隣接地でおこなわれた調査（図 29）において、同時期同規模の室町時代後期の堀跡（SD115）が検出されている。今回の調査で検出した堀 78 も同じ南北方向の堀跡で、両堀の心心 28m 程を測る。堀 SD115 は櫛司小路の中央部に沿って掘られており、天文法華の乱（1532～1536 年）に伴う構えの一部と考えられている。この堀のすぐ南、四条大路を挟んで立本寺（妙覚寺・図 28 の 466）の構え跡があり、北へ 200m 離れたところに旧本能寺の構え跡（467）がある。また、立本寺の左右には本隆寺の構え（465）、妙蓮寺の構え（707）、妙満寺の構え（708）、本禅寺の構え（709）跡などが四条大路の南辺部に建ち並ぶ。今回の調査で検出した堀 78 と堀 SD115 間の内法は 23m を測り、建物を圍繞する堀としては間隔が狭い。この両堀は櫛司小路の本来の道路機能を踏襲した形で旧本能寺と立本寺をはじめとする四条大路に並び北面する五ヶ寺とを軍事的に結びつける機能を持ったものと考えられる。軍事上、法華宗二十一ヶ寺の構えが孤立的な形で完結することはあり得ず、京中が城塞化したと云われるその実態は、文献資料からは容易にうかがうことのできないものであり、考古資料の地道な積み上げによってのみ初めて明らかになるものと考えられる。そうした意味においても堀 78 と堀 SD115 の検出は当時の法華宗二十一ヶ寺の構えの実態、その一端を示すものとして重要な意味をもつものと考えられる。



図28 調査地点と日蓮宗寺の構え跡関係図(1/12,500)

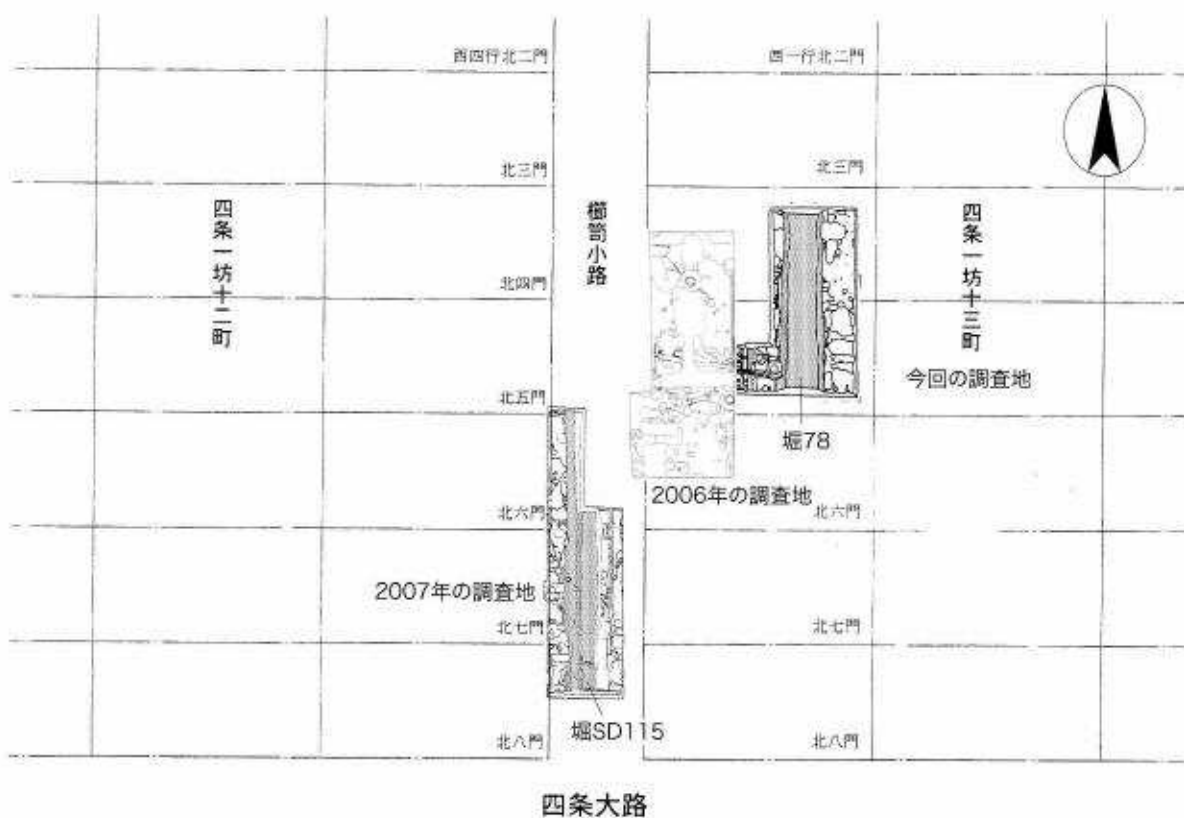


図29 調査区と堀の位置関係図(1/1,000)

(財)京都市埋蔵文化財研究所発掘調査2006-33より転載・修正加筆)

「大伴」銘軒瓦について

今回の調査においては「大伴」銘の同文軒瓦が11点出土した。また同じ十三町の西隣接地の調査（2006年）においても7点ほど出土している。「大伴」銘同文軒瓦はこれまで東寺、西寺、野寺、御所、広隆寺、珍皇寺（愛宕寺）、法禅寺跡、禅林寺、林寺（東福寺の近く東林町）、宇治岡本遺跡など10カ所以上の地点で確認されているが、それらはほとんどが寺院跡でしかも単発的に各数点出土したに過ぎない。今回のように平安京内の貴族などの邸宅跡が想定されるところで20点近くも出土した例はこれまで皆無で、この十三町の住人とその性格を考える上で重要な意味があるものと考えられる。今回出土した同文の軒丸瓦67は平安時代前期の池144堆積土より出土したもので、十三町における当時の建物遺構に伴うものと考えられる。また西隣接地の調査で出土した「大伴」銘軒瓦が同じ池（SG158-旧）の埋土および上面の整地層から出土したことが報告されており、「大伴」銘軒瓦を葺いた建物などが平安時代前期この十三町にあった可能性は高いといえる。

木村捷三郎氏は「大伴」の銘が、何から来たか不明であるが、弘仁14年（823）4月16日、大伴の名が新たに即位された淳和天皇の諱に当るため、それを避けて、大伴氏を伴氏と改めしめた記事（日本後紀）がある。以来「大伴」銘の瓦は製作を停止したであろう。」とされている。

平安時代前期の軒瓦で瓦当面に何らかの銘を入れるものとしては、「旨」「官」「近」「左寺」「西寺」「土」「左兵」「中」などが知られている。それらはいずれも寺院や瓦屋などを示すものとされており、「大伴」銘が一氏族の名前であるとするならばきわめて特異な瓦と言うべきであろう。

今回出土した軒丸瓦63は、凸形中房部の円形界線の中に「大伴」銘を入れるが、同文の軒丸瓦64は中房部の界線は消滅して認められず、しかも軒丸瓦63より中房部がやや突出した形態を呈する。それは瓦範から「大伴」銘の部分を取り取った結果、そのような状態になったものとみられる。これは弘仁14年以降も同文瓦がしばらく継続して使用されたことを示しており、また木村氏の推定的一端を裏付けるものでもある。木村氏が指摘するように「大伴」銘軒瓦が弘仁14年以前に製作されたものであるならば、9世紀の前半この左京四條一坊十三町の地に大伴氏に關係する邸宅跡があったことを想定することは可能である。

大伴（継人、竹良）氏は長岡宮造營に関する藤原種継暗殺事件を契機に失脚したものの、桓武天皇は大和元年（806）に至って、藤原種継暗殺事件に連座した人々をすべて本位に復させ、また早良親王の霊を慰めるため諸国国分寺の僧に春秋二季読経することを命じた上、正殿に没した（日本後紀）、とされている。

『日本三代実録』の貞観8年（866）9月22日の条に「（大伴）國道はその父継人の事に縁坐して、佐渡の国に配流せらる。人となり聡敏にして頗る才有り。国宰優愛し引きて師友と為し、疑難有るに至れば事毎に決を取り、案牘、文簿、其の手に成りき。（延暦）廿四年、恩赦に会いて都に入るを得、職内外を歴て常に清顕に居り、爵は従四位上に至り官は参議に登りき。」とある。

「大伴」銘軒瓦はこのような大伴國道の時代と重なり、平安時代前期の瓦窯生産が主として官営工房でなされていたことを考えれば、当時の政治状況と密接な形のもとに、つまりそれは大同

元年の大伴氏の復位を契機として、「大伴」銘軒瓦が製作されたことを強くうかがわせるものである。今まで「大伴」銘軒瓦が東寺と関連する寺院跡での出土が知られてはいたものの、この平安京四條一坊十三町には大伴氏に關係する邸宅と「大伴」銘軒瓦を葺いた建物があった蓋然性はきわめて高いと言える。それがどのような建物であったかどうかは不明であるが、あるいは仏堂のようなものを想定することも可能であろうか。今後の検討課題としたい。

以上今回の調査においては、京内では珍しく多量の瓦類が出土し、その中に「大伴」銘軒瓦が数多くが含まれることは、この四條一坊十三町における邸宅跡の住人を考える上で重要な発見となった。また、調査区全域で平安時代前期の池跡の広がりを確認したが、池 144 は西二行の北四・五門に広がっていく様相を呈し、この十三町における建物は北四門以北及び西三行以東に存在するものと考えられる。中世の遺構としては、調査区を南北に突き抜ける室町時代後期の大溝を検出し、新たな構えの存在を知ることができ、今後の周辺の調査に多くの課題を提供することとなった。

註

註 1 「平安京左京四條一坊十三町跡 2006-10」(財)京都市埋蔵文化財研究所 2006 年

註 2 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所 1994 年

註 3 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第 3 号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

註 4 木村捷三郎「瓦類」『洛南高等学校新築体育館用地 埋蔵文化財調査報告』東寺境内発掘調査団 洛南高校班 1981 年

註 5 「木村捷三郎取集瓦図録」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

註 6 「大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書」大谷高等学校 法住寺殿跡遺跡調査会 1984 年

註 7 杉山信三 梶川敏夫 清野紀子「栢社遺跡調査概報」鳥羽離宮調査研究所 1975 年

註 8 「平安京左京四條一坊十二・十三町跡 2006-33」(財)京都市埋蔵文化財研究所 2007 年

註 9 京都市遺跡地図台帳(平成 19 年度)より転載。

山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭」京都大学人文研究所第 35 号 1986 年

馬瀬智光「洛中・洛外の城館について」『第 12 回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集-京都の城・構・館-』京都府埋蔵文化財研究会 2004 年

註 10 山本雅和「中世都市の堀について」『研究紀要第 2 号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995 年

註 11 註 4 と同じ。

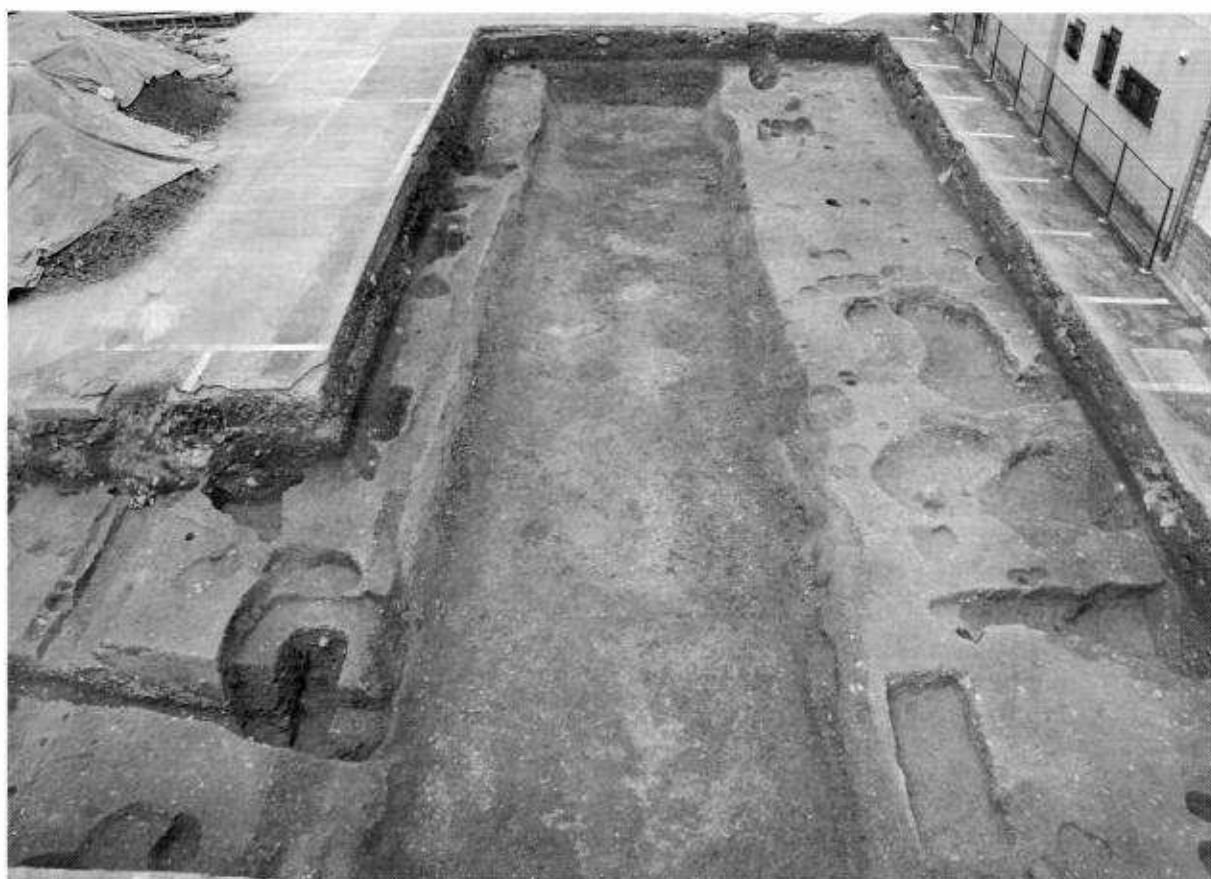
註 12 同上。

註 13 同上。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょういちほうじゅうさんちょう							
書名	平安京左京四条一坊十三町							
副書名	壬生坊城町の調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	家崎孝治							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404							
発行年月日	2011年6月1日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 しじょういちほうじゅう 四条一坊十 さんちよう 三町	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 みぶぼうじゅうちよう 壬生坊城町5	26100		35度 00分 15秒	135度 44分 52秒	2011.02.14 ～ 2011.04.05	335 m ²	葬儀場建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 四条一坊十 三町	都城跡	平安時代～室町 時代	土塙、柱穴、溝、 堀、井戸	土師器、須恵器、 緑釉陶器、灰釉 陶器、黒色土器、 瓦器、陶器、石 製品、土製品、 金属製品、木製 品、瓦類	平安時代前期の 池、室町時代後 期の堀跡、「大 伴」銘軒瓦			

圖 版



1 第2面全景（南から）



2 第2面南西部（南東から）



1 第3面全景（南から）



2 第3面南西部（南東から）



1 第4面全景（南から）



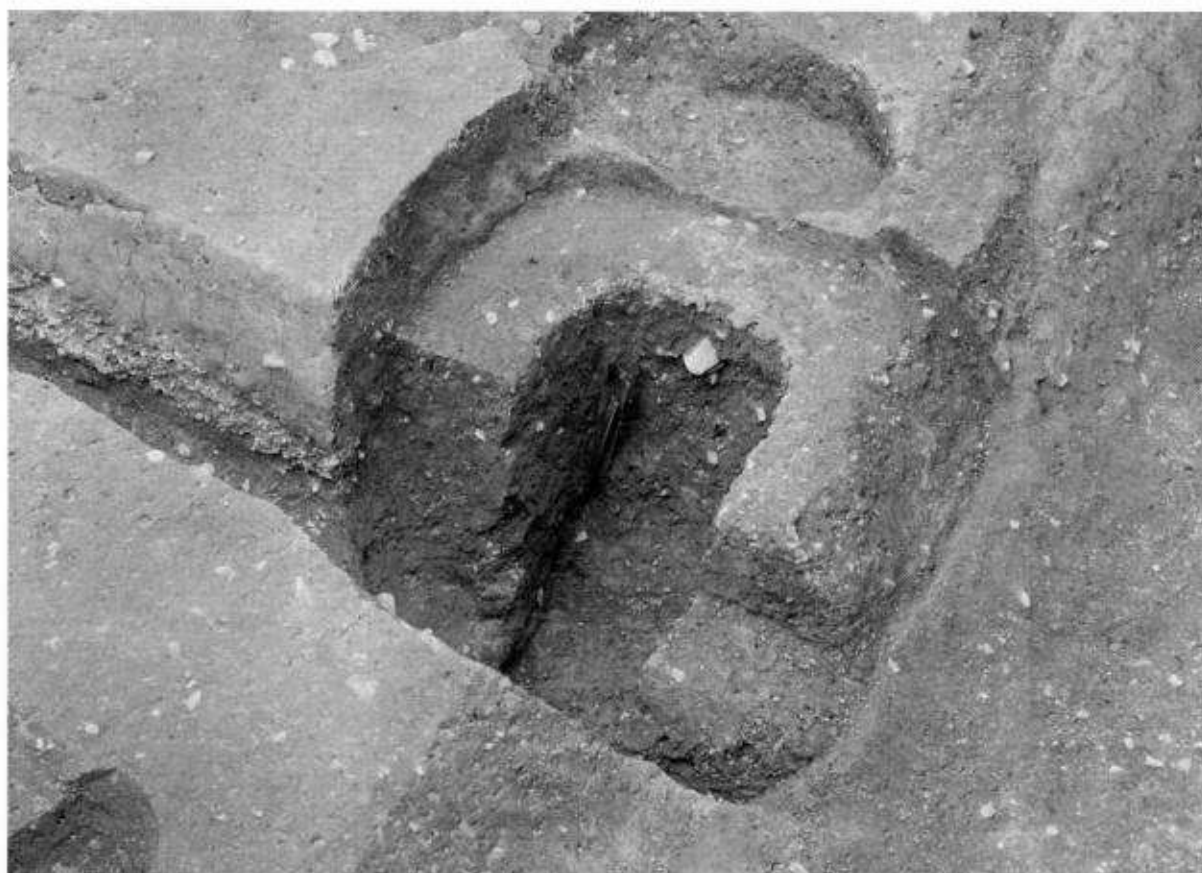
2 第4面南西部（南東から）



1 堀78北壁断面(南から)



2 堀78南壁断面(北から)



1 井戸76 (南東から)



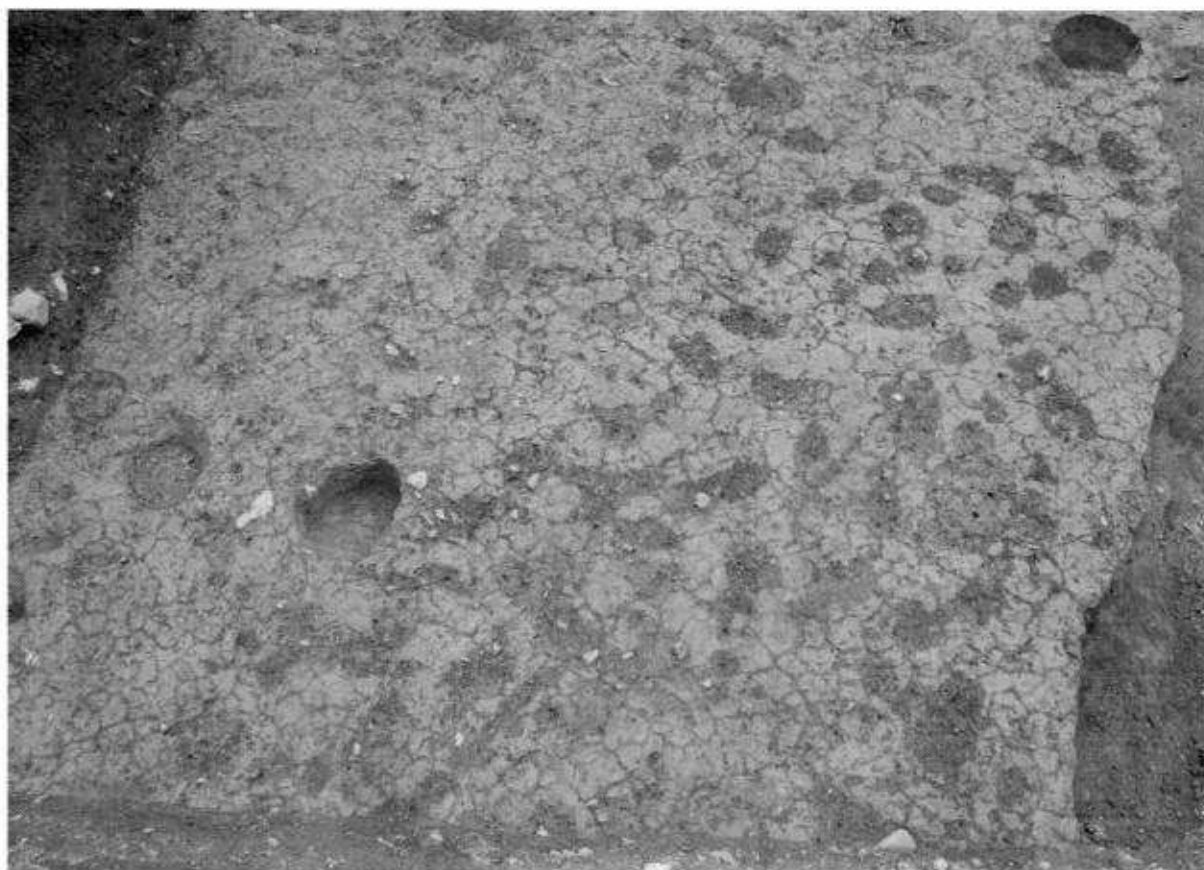
2 井戸76 土器出土状況 (南から)



1 土壙 124 (南から)



2 土壙 154 (北から)



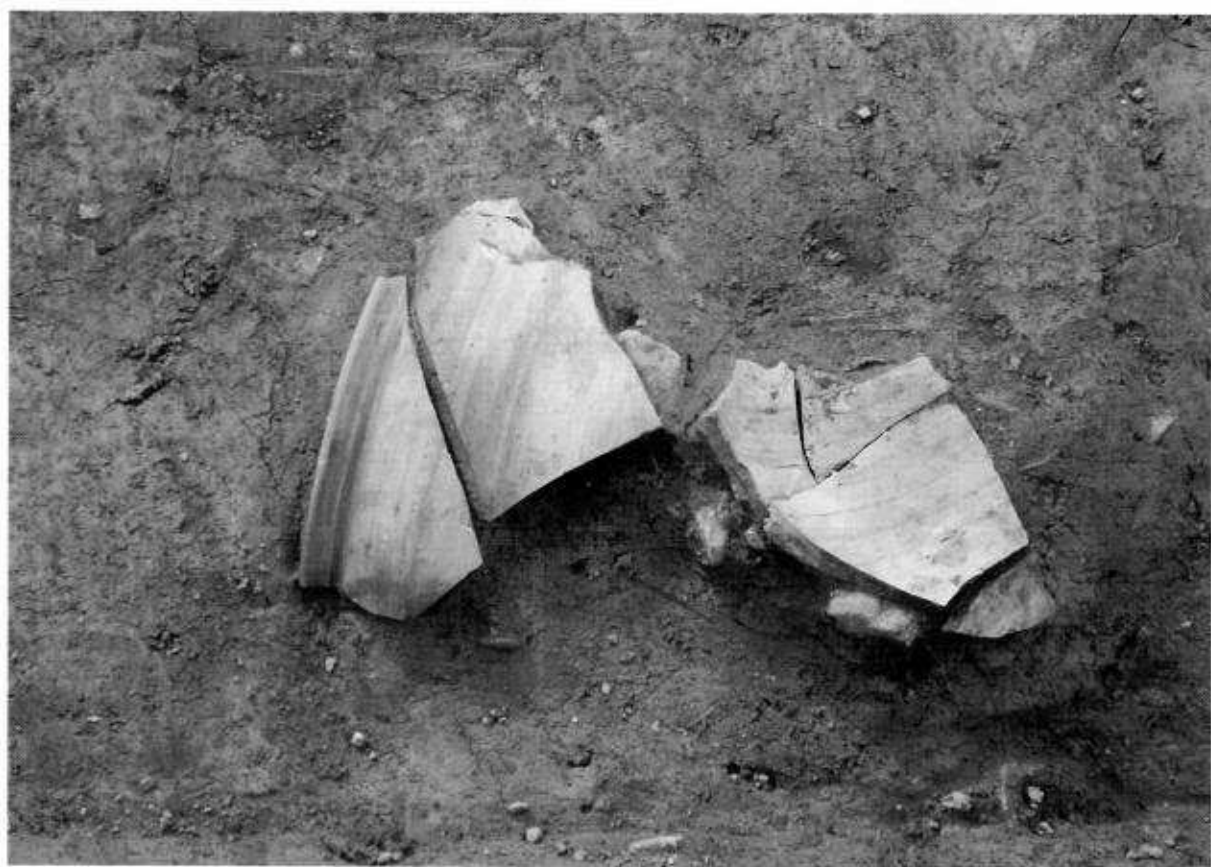
1 池 144 上面足跡出土状況 (東から)



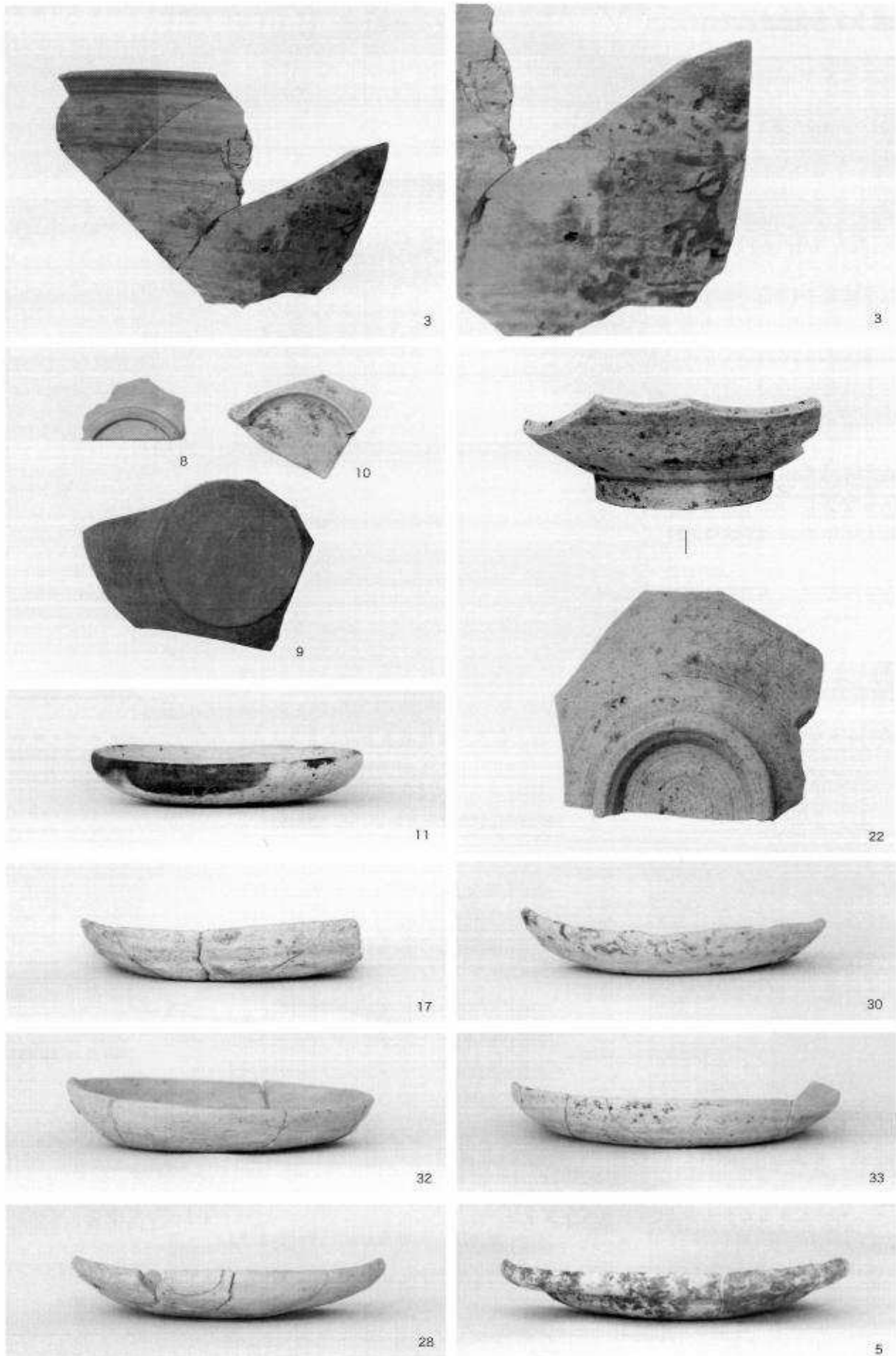
2 建物 1・2 (北西から)



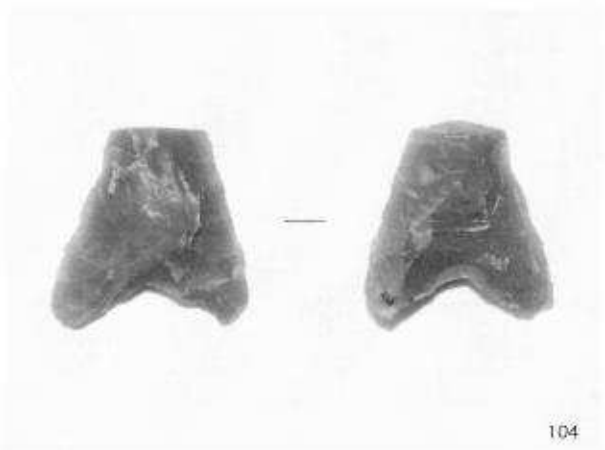
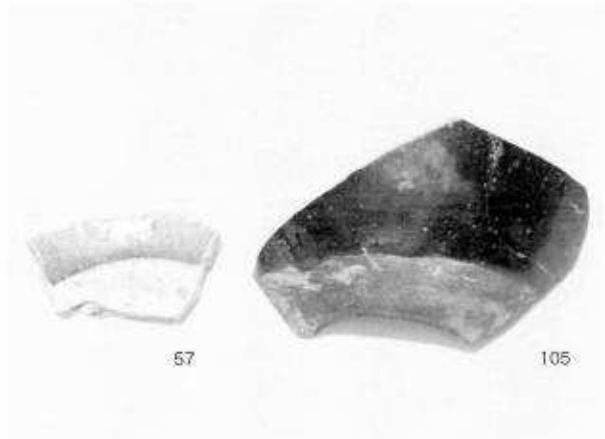
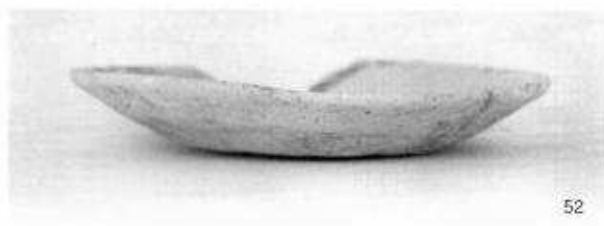
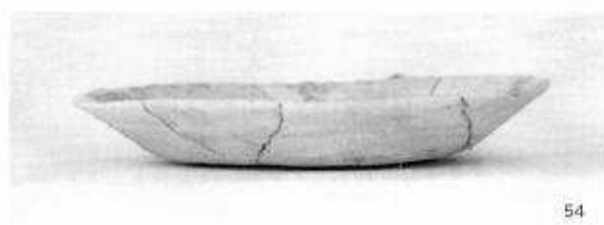
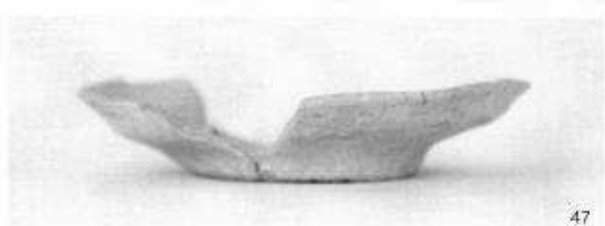
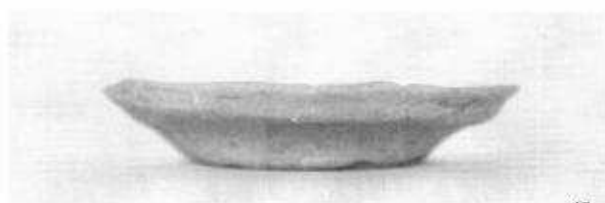
1 池 144 南東部 (南西から)



2 土器 3 出土状況 (東から)



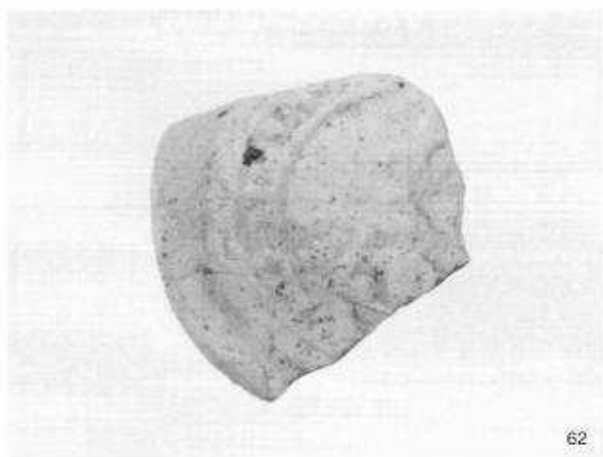
池144(3)・土城154(8~10)・井戸76(11・17・22・28・30・32・33)・池144整地層(5)出土遺物



溝 33 (47・49・50～55)・掘 78 (57・60・105)・池 144 (6)・池 144 整地層 (104) 出土遺物



61



62



63



64



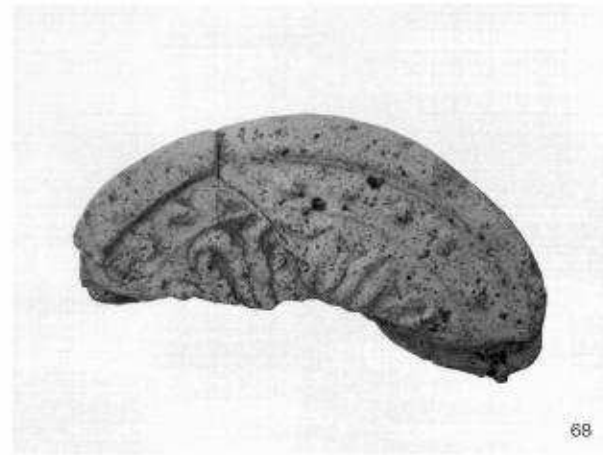
65



66



67



68

土壙 154 (64・66)・土壙 124 (61・62・63)・土壙 69 (65)・池 144 (67)・土壙 68 (68) 出土遺物



69



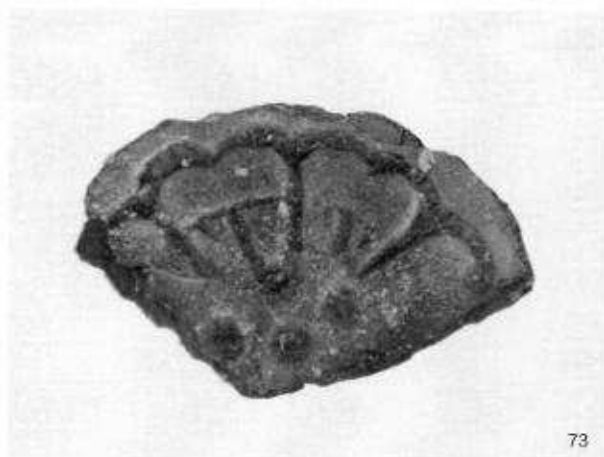
70



71



72



73



74



75

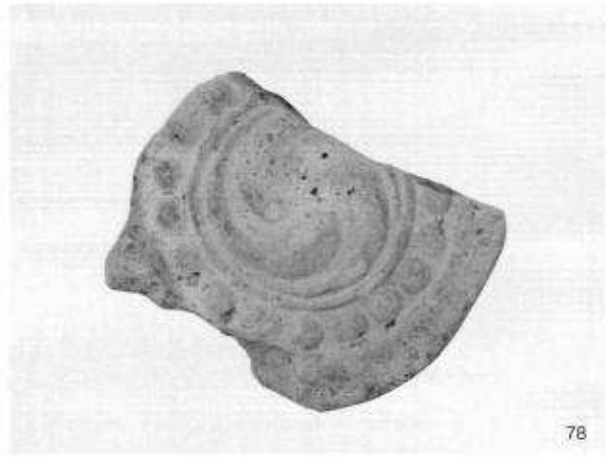


76

堀 78 (69)・土壙 124 (70・71・74)・柱穴 38 (72) I・A～C区清掃中 (73) 土壙 69 (75)・
土壙 131 (76) 出土遺物



77



78



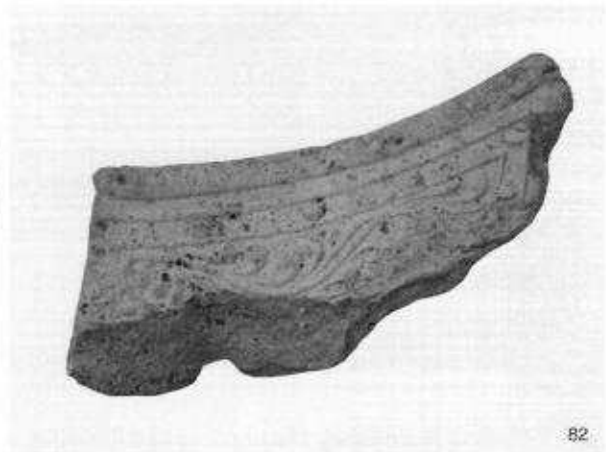
79



80



81



82

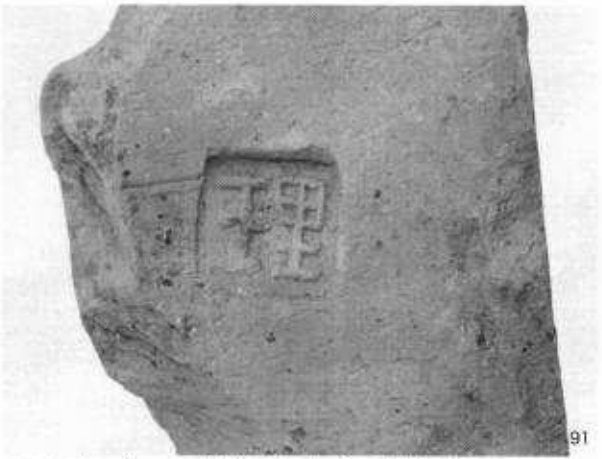
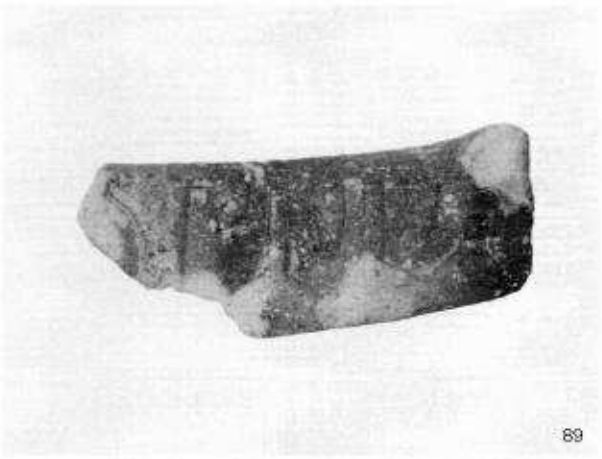
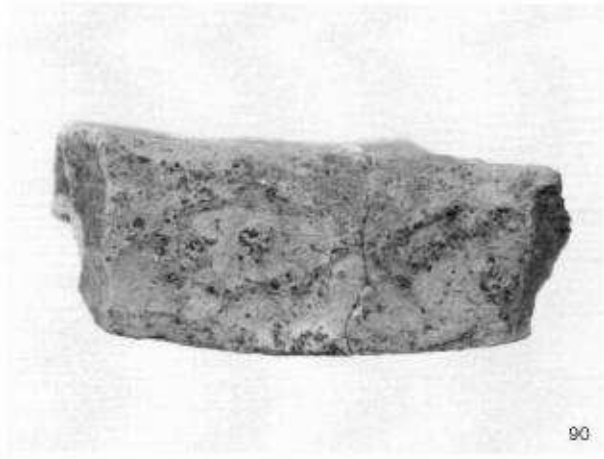
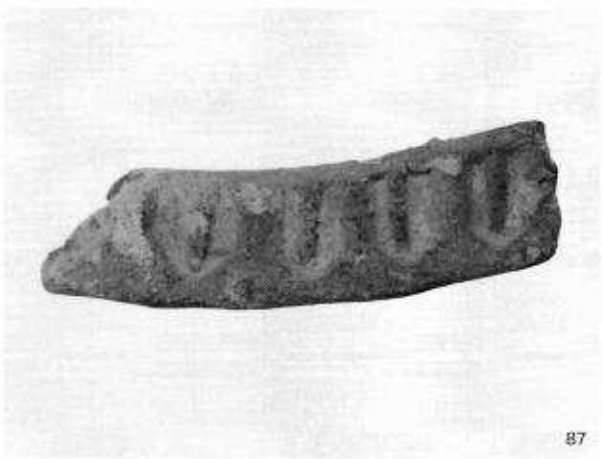
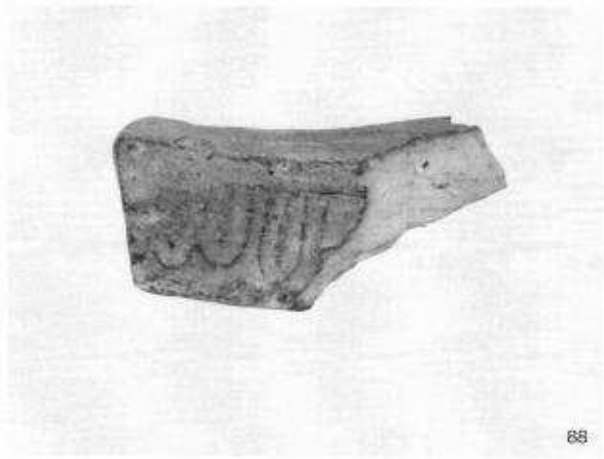
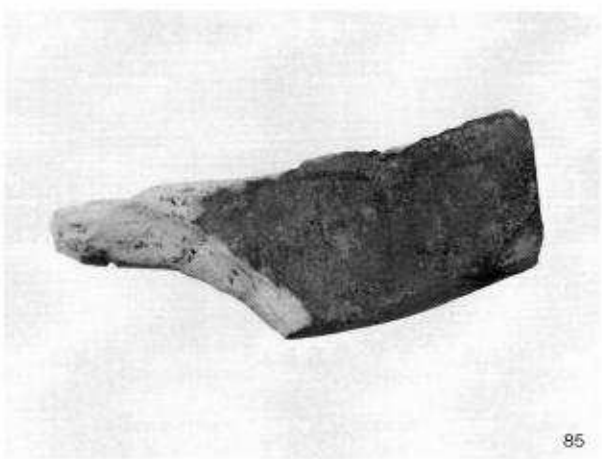
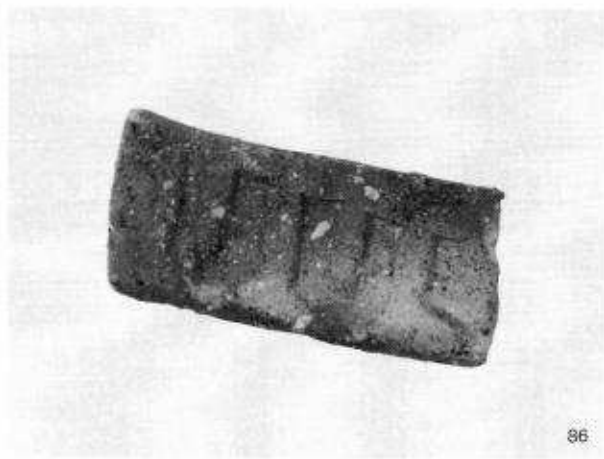


83

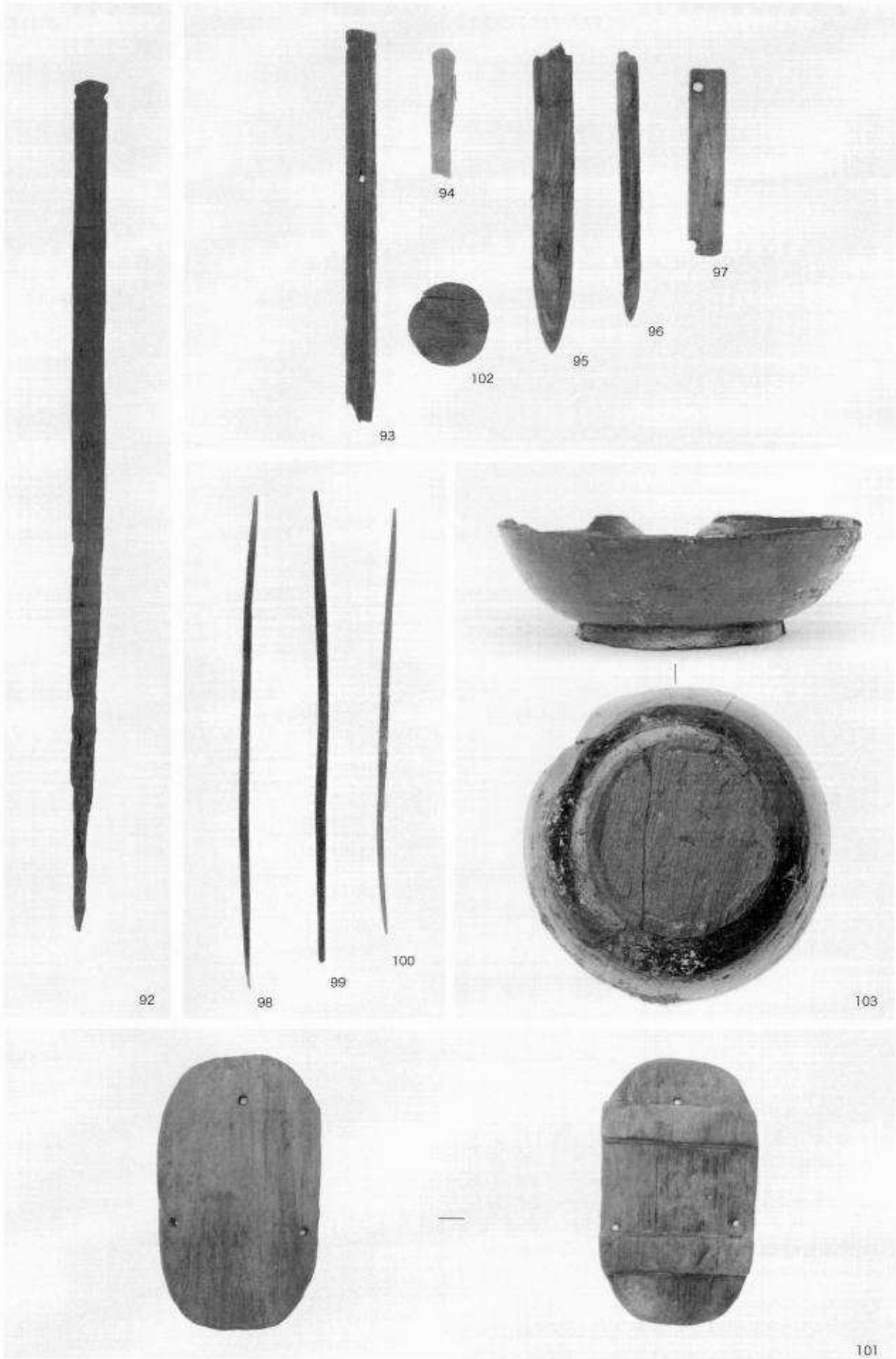


84

土壙 124 (77・78・80・81・83・84)・土壙 37 (79)・土壙 154 (82) 出土遺物



土壙 124 (85・86)・堀 78 (87・89)・柱穴 38 (88)・柱穴 59 (90)・池 144 整地層 (91) 出土遺物



井戸 76 出土木製品

平安京左京四条一坊十三町
- 壬生坊城町の調査 -

発行日 2011年6月1日

編集
発行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404
TEL (078) 857-6368

印刷 (有)京都編集工房
〒612-0868 京都市伏見区深草直違橋南1-254-24
TEL (075) 643-6978